

市道岩本麓線拡幅工事に伴う発掘調査報告書

いわ もと ふもと
岩 本 麓 遺 跡

平成28年3月
指宿市教育委員会

例　　言

1. 本書は、鹿児島県指宿市岩本麓に所在する岩本麓遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は平成26年5月8日から平成26年7月16日まで実施された。起因事業は指宿市による市道岩本麓線拡幅工事である。
3. 報告書作成は、指宿市教育委員会で実施した。

組織は以下のとおりである。

発掘調査主体	指宿市教育委員会	教育長	西森　廣幸
発掘調査責任者	指宿市教育委員会	教育部長	浜島　勝義
発掘調査担当組織員	指宿市教育委員会	社会教育課長	満石　知
		社会教育課参事	福ヶ迫　忠
		管理係主幹兼係長	海江田　勝博
		社会教育係主幹兼係長	内村　喜代志
		文化担当主幹	中摩　浩太郎
		文化係係長	鎌田　洋昭
		文化係主任	西牟田　淳
		文化係技師	恵島　瑛子

発掘調査作業員　飯塚勝正、紙屋義則、諫訪園　繁、高橋　史、高橋美吉、浜崎武則、演村幸藏、

堀口ツユ子、丸山治則、南　謙吉、山口俊夫、吉崎義人、吉元　妙

整理作業員　清　秀子、竹下珠代、鎌田真由美、境　由希

4. 本書の編集・図面作成、写真撮影は、恵島瑛子が行い、中摩浩太郎、鎌田洋昭の協力を得た。
5. 遺構の平面図作成、出土遺物分布図、層位断面図については(株)埋蔵文化財サポートシステムの椎葉博昭氏、多々良正人氏、富永朋美氏、権現領美千代氏、中摩浩太郎の協力を得た。
6. 成川式土器の位置づけについては、松崎大嗣氏(鹿児島大学大学院人文科学系研究科)にご教示いただいた。
7. 図中に用いられている座標値は、国土座標系第II系に準ずる。
8. 本書の層位、遺物の色調は『標準土色帖』に準ずる。※遺物のマンセル値は、土色計SCR-1を使用し測色した。
9. 遺物観察表、遺物実測図、遺構図の表記凡例は、『橋牟礼川遺跡Ⅲ』(1992、指宿市教育委員会)と『水迫遺跡Ⅰ』(2000、指宿市教育委員会)に準ずる。観察表の特殊な表記については下記のとおりである。
土器の混和材【カ：角閃石、セ：石英、ウ：雲母、金：金雲母、白：白色粒、黒：黒色粒、赤：赤色粒、褐：褐色粒】
土器部位・法量【口：口縁部、口縁部径、肩：肩部、肩部最大径、胴：胴部、胴部最大径、底：底部、底部径】
調整【内：内面、外：外面、口唇：口唇部、突：突帯部、底：底面、脚内：脚台内面、脚端：脚台接地面】
色調【内：内面、外：外面、肉：器肉】
10. 発掘調査で得た全ての成果については、指宿市考古博物館時遊館COCOはしむれで保管し、活用する。

本文目次

第1章 調査に至る経緯と調査概要	1
第1節 遺跡の位置と環境	1
第2節 確認調査に至る経緯と調査の概要	1
第3節 本調査に至る経緯と調査の概要	3
第2章 遺跡の層序	4
第3章 調査の成果	6
第1節 近世～近現代の調査	6
第2節 中世の調査	10
第3節 楠文時代後期後葉～古墳時代の調査 (5 + 6層の調査)	12
第4節 池田カルデラ火山性噴出物堆積層	36
(第7層) の調査	
第4章 まとめ	37

挿図目次

第1図 岩本籠遺跡位置図(1)	
第2図 岩本籠遺跡位置図(2) (S=1/10,000×1.5)	
第3図 国道部分試掘調査・市道部分確認調査出土遺物 (S=1/2)	
第4図 層位模式柱状図	
第5図 調査区北側の法面 層位断面図 (S=1/40)	
第6図 調査区東壁層位断面図 (S=1/40)	
第7図 近世土坑平面図・断面図 (S=1/20)	
第8図 近世土坑出土遺物 (S=1/2)	
第9図 搅乱中出土遺物(1) (S=1/3)	
第10図 搅乱中出土遺物(2) (10・11・13: S=1/2 12,14~19: S=1/3)	
第11図 近世土坑・中世ピット配置図 (S=1/80)	
第12図 中世ピット平面図・断面図 (S=1/20)	
第13図 5 + 6層出土遺物分布図 (S=1/80)	
第14図 石斧・土器集中出土部位平面図・見通し断面図 (S=1/10)	
第15図 石斧・土器集中出土部位出土遺物(1) (S=1/3)	
第16図 石斧・土器集中出土部位出土遺物(2) (S=1/3)	
第17図 石斧・土器集中出土部位出土遺物(3) (S=1/3)	
第18図 5 + 6層出土遺物(1) (S=1/3)	
第19図 5 + 6層出土遺物(2) (S=1/3)	
第20図 5 + 6層出土遺物(3) (S=1/3)	
第21図 5 + 6層出土遺物(4) (S=1/3)	
第22図 5 + 6層出土遺物(5) (S=1/3)	
第23図 5 + 6層出土遺物(6) (S=1/3)	
第24図 5 + 6層出土遺物(7) (S=1/3)	

第25図 第7層上面地形および調査区完掘状況
(S=1/200)

写真図版目次

写真1 指宿市北麓空撮	
写真2 調査区北側法面層位(1)	
写真3 調査区北側法面層位(2)	
写真4 調査区東壁層位	
写真5 先行トレンチ完掘状況	
写真6 第4層検出状況	
写真7 5 + 6層上面近世土坑・中世ピット・搅乱検出状況	
写真8 近世土坑完掘状況	
写真9 中世ピット5・ピット6完掘状況	
写真10 5 + 6層遺物出土状況(1)	
写真11 5 + 6層遺物出土状況(2)	
写真12 5 + 6層遺物出土状況遠景	
写真13 第7層上面検出状況	
写真14 石斧・土器集中出土部位(1)	
写真15 石斧・土器集中出土部位(2)	
写真16 石斧・土器集中出土部位(3)石斧取り上げ後	
写真17 第7層深掘り東壁	
写真18 第7層深掘り西壁	
写真19 第7層(近景)	
写真20 発掘調査作業状況	
写真21 市内中学校職場体験学習	
写真22 市民講座発掘体験	
写真23 試掘・確認調査出土遺物	
写真24 近世土坑出土遺物	
写真25 搅乱出土遺物①	
写真26 搅乱出土遺物②	
写真27 石斧・土器集中出土部位出土遺物①	
写真28 石斧・土器集中出土部位出土遺物②	
写真29 5 + 6層出土遺物①	
写真30 5 + 6層出土遺物②	
写真31 5 + 6層出土遺物③	
写真32 5 + 6層出土遺物④	
写真33 5 + 6層出土遺物⑤	

第1章 調査に至る経緯と調査概要

第1節 遺跡の位置と環境

指宿市は、薩摩半島の南端に位置する。地形的には、山地、台地、平野、湖沼の4つに大別される。中でも九州最大のカルデラ湖である池田湖は、約5,700年前に噴火し、その噴出物は厚く指宿地方を覆い、本市の地形形成の大きな要因となっている。

また、南西にある開聞岳も、縄文時代後期に活動を開始して以来噴火を繰り返していた。指宿市内の各地で、黄コラ（縄文時代後期）、暗紫コラ（弥生時代中期）、青コラ（7世紀第4四半期）、紫コラ（西暦874年3月25日）などの噴出物が確認され、国指定史跡指宿枕崎線遺跡は、開聞岳噴火による火山災害遺跡としても知られている。

岩本麓遺跡は、指宿市岩本麓に位置する。遺跡は標高50m前後の台地から緩やかに下りてきた、標高6～7mの海岸段丘に立地している。調査区の北側は岩本漁港に面しており、海食による崖面となっている。遺跡の南には国道226号線とJR指宿枕崎線が走る。遺跡の所在する今和泉集落の北側には、かつて今和泉島津家初代の島津忠邦が宝曆4年（1754）に建立した今和泉島津家の館があった。現在、跡地には当時をしのばせる石垣や手水鉢、井戸が残っている。岩本麓遺跡の周辺は、江戸時代は在郷武家の麓集落であり、現在でも当時の町割りが残っている。国道から山手側（西側）には、市指定文化財である今和泉島津家墓地や、第3代忠厚と第4代忠喬が隠居していた屋敷跡、そして今和泉郷の郷社である豊玉媛神社が祀られているなど、江戸時代の史跡が点在している。

第2節 確認調査に至る経緯と調査の成果

市道岩本麓線の拡幅工事は、国土交通省九州地方整備局鹿児島国道事務所による、国道226号岩本交差点改良事業に伴い計画されたものである。



第1図 岩本麓遺跡位置図(1)



第2図 岩本麓遺跡位置図(2) (S=1/10,000×1.5)

■国道部分の調査について

国道部分の発掘調査に至る経緯と成果については、吉岡康弘・黒木梨絵・中村有希・江神めぐみ（編）2015『岩本麓遺跡』公益財団法人鹿児島県文化振興財團埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書（4）で報告されている。試掘調査は平成23年11月と平成24年7月、鹿児島県文化財課により実施され、近世・近代陶器を中心に古墳時代～中世の遺物が出土した。

この結果を受け、県文化財課から委託を受けた公益財団法人鹿児島県文化振興財團埋蔵文化財調査センターが本調査を実施した。期間は平成25年8月19日から29日。成果としては、縄文時代後期・晚期～弥生時代の遺物包含層が確認されたほか、古墳時代～近世の遺物が出土した。また、遺構としては溝状造構、ピット22基（いずれも時期不明）が検出されている。

今回は試掘調査の出土遺物のうち2点を図化した（第3図）。試1は龍泉窯系青磁碗の底部である。見込みには草花文と思われる文様が認められるが、掘り込みが浅く判然としない。試2は苗代川産と考えられる陶器甕の口縁部である。口唇部は施釉後剥ぎ取りを行っている。

■市道部分の調査について

平成24年8月16日、指宿市教育委員会が市道工事予定地で分布調査を実施したところ、市道部分にも遺跡が広がっていることが想定された。市道部分の発掘調査は、市道を国道交差点に据えつける工法上、国道の工事完了後に実施する計画であったことから、本調査の結果を受けて、指宿市建設部土木課と協議の上、平成26年2月12日、確認調査を実施した。工事予定地内に3箇所のトレンチを設定し、延べ面積6m²、地表面から70cmの深さまで掘削を行ったところ、紫コラ（西暦874年3月25日の

開聞岳噴出物）と池田カルデラ噴出物層（約5,700年前）の間に茶褐色土層と黒色土層が堆積しているのが確認され、茶褐色土層から成川式土器片が、黒色土層からは縄文時代後晩期相当の土器片が出土したことから、それぞれ古墳時代と縄文時代後期・晩期の遺物包含層と推定した。

出土遺物のうち2点を図化した（第3図）。確1は成川式土器の脛部である。縦縄突帯を巡らす。外面の突帯下にはススが付着する。2は縄文土器の脛部片である。外面はミガキが施される。後期後葉から晩期に位置づけられる。

*確認調査は平成25年度市内道路発掘調査等事業により実施し、要した経費のうち、50%は国、10%は県からの補助を得た。

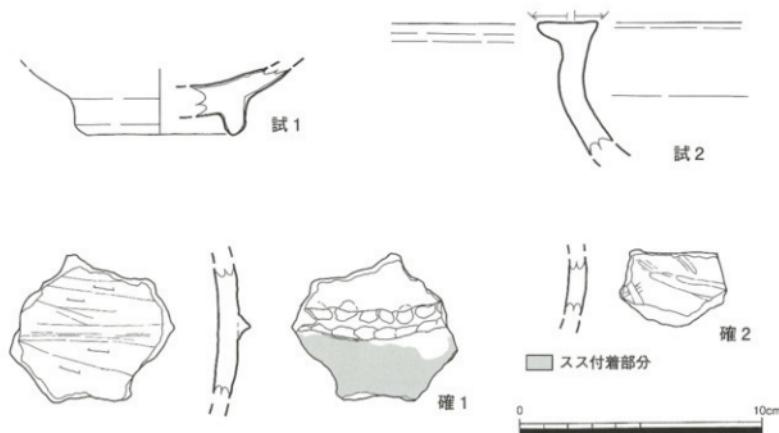
第3節 本調査に至る経緯と調査の概要

市道岩本麓線拡幅に伴う工事は、大方は既存の道路を改修する工法であったが、予定地北側の個人住宅が移転した一筆については、最深で4m程度掘削し坂道を造る設計であった。そこで、この宅地部分を調査対象とし、東西10m、南北最長24mの調査区を設定し、本調査を実施した。調査期間は平成26年5月8日から平成26年7月16日、調査面積は約240m²である。

本調査では、表土を重機で除去した後、まず調査区の東端に幅1mの先行トレーンチを設定し人力で掘り下げ、旧地形および包含層の厚さを把握した上で、調査区全体を掘り下げた。

結果、紫コラから上の地層は残存していなかったため、江戸時代の武家の麓集落に関する成果は得られなかったものの、近世の性格不明の土坑1基、中世のピット9基が確認されたほか、特筆すべきものとして、縄文時代晩期終末～弥生時代前期の石斧・土器集中出土部位が検出された。

なお、調査対象外の市道部分については工事立会を実施したが、遺構・遺物は確認されなかった。

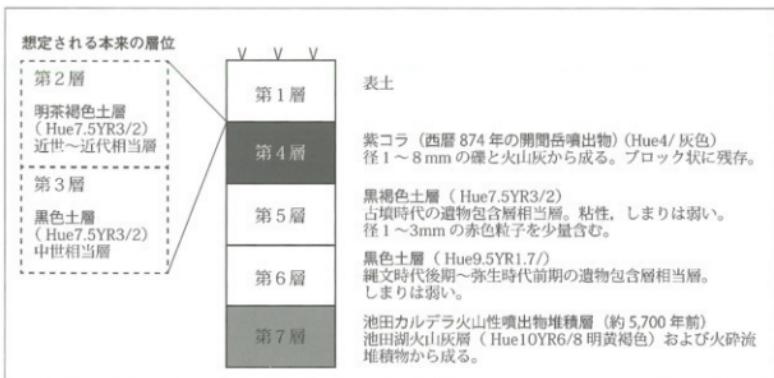


第3図 国道部分試掘調査・市道部分確認調査出土遺物 (S=1/2)

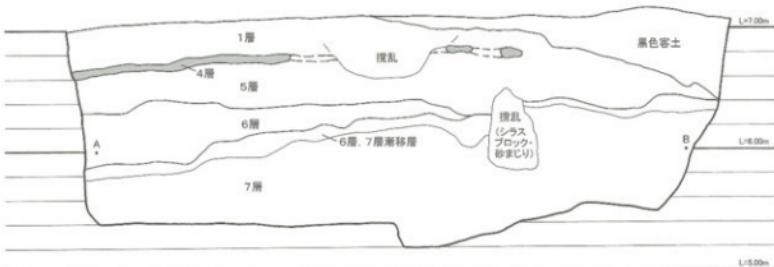
第2章 遺跡の層序

調査区において土層の堆積が良好にわかる、調査区北側の法面の層序を基本層序とした。

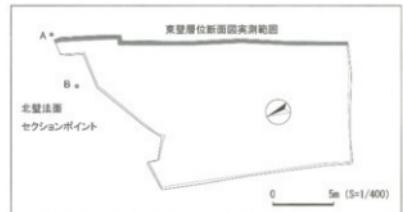
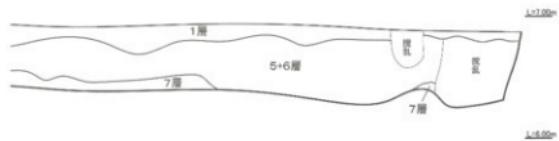
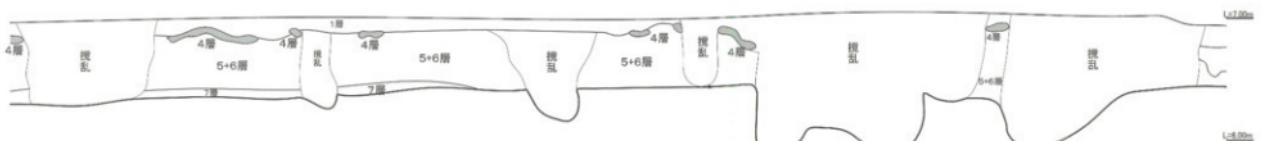
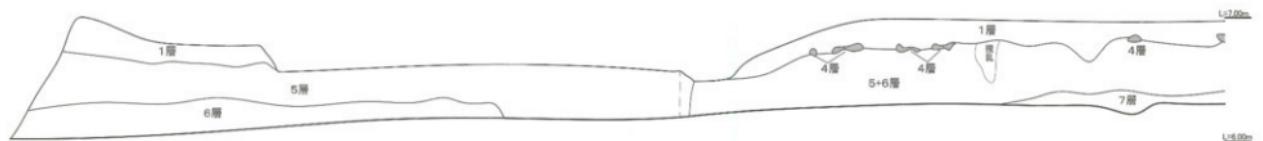
今回の調査地点では、表土の直下に紫コラ（西暦874年の開闢岳噴出物）が部分的に残存する状況であり、近世・中世の土層が欠落している。しかしながら、今回検出された近世に比定される土坑の埋土および中世に比定されるピットの埋土も、本来紫コラの上位に堆積していた土層と捉えられるところから、層名としては表土を第1層、近世の土坑の埋土（明茶褐色層）を第2層、中世のピットの埋土（黒色土層）を第3層、紫コラを第4層とした。紫コラの下位には、青コラ（7世紀第4四半期の開闢岳噴出物）は確認されず、第5層とした古墳時代の遺物包含層、第6層とした縄文時代後期後葉～弥生時代前期の遺物包含層が堆積する。ただし、第5層と第6層が明瞭に区別されるのは調査区の北側の一部分のみであり、調査区の大半では地層が搅拌され、縄文時代後期後葉から古墳時代の遺物が混在して出土する状況であったことから、5+6層と表記する。その下位には池田カルデラ火山性噴出物（約5,700年前）が堆積し、これを第7層とした。



第4図 層位模式柱状図



第5図 調査区北側の法面 層位断面図 (S=1/40)



第6図 調査区東壁層位断面図 (S=1/400)

第3章 調査の成果

第1節 近世～近現代の調査

(1) 遺構

5 + 6層上面で、近世に比定される土坑1基を検出した。平面形は不整形な橢円形を呈し、検出面での法量は、最大長73cm、最大幅57.5cm、下場までの深さは73cmを測る。埋土は第2層を主体とする。底部付近で軽石3点と近世陶器の小片1点（第8図、写真図版24）が出土したが、土坑の性格は不明である。

陶器は皿の口縁部である。内外面に船軸を掛け、外側は工具で削ることで色の濃淡を出している。龍門寺系の可能性がある。

(2) 遺物（第9図、第10図）

調査区は虫食い状態に現代の搅乱を受けていた。搅乱は表土から第7層まで掘り込まれ、第7層のプロックを含んで埋め戻されたものであり、中には繩文時代後期から近現代の遺物が含まれている穴もあった。今回は搅乱中から出土した遺物のうち19点を図化した。

1は入佐式土器精製浅鉢の口縁部である。口縁部は外反して開き、外側には沈線が1条めぐる。繩文時代後期終末～晩期初頭に位置づけられる。

2は繩文時代晩期土器の底部である。平底で底部外側はやや外に開く。

3は刻目突帯文土器深鉢の口縁部～胴部の破片である。口縁端部はわずかに外反する。口縁部と胴部屈曲部に突帯を巡らせ、胴部屈曲部の刻目はヘラ状工具を刻む際に寝かせることで「D」字状を呈する。内面の器面調整はケズリ状の工具ナデによる。

4は弥生時代前期に位置づけられる孢彈形壺の口唇部である。口唇部は直立し、端部に小ぶりな刻目を施す。

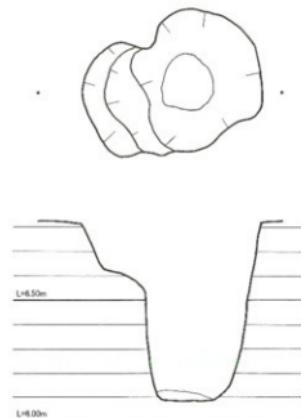
5は弥生時代中期前半の入米II式土器壺の口唇部である。断面は台形を呈し、端部はナデにより凹む。胎土に金色の雲母を含む。

6・7は弥生時代中期土器壺の胴部であり、同一個体と考えられる。三角突帯を3条巡らす。胎土に金色の雲母を含む。

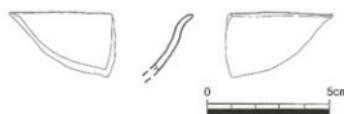
8は古墳時代の東原式土器壺の頸部～胴部である。頸部外面は工具によるカキアゲが施され、緩やかに屈曲する。

9は成川式土器高壺の脚部である。赤色顔料が塗布され、ミガキ調整が施されるが、器面が摩滅しているため単位は不明瞭である。

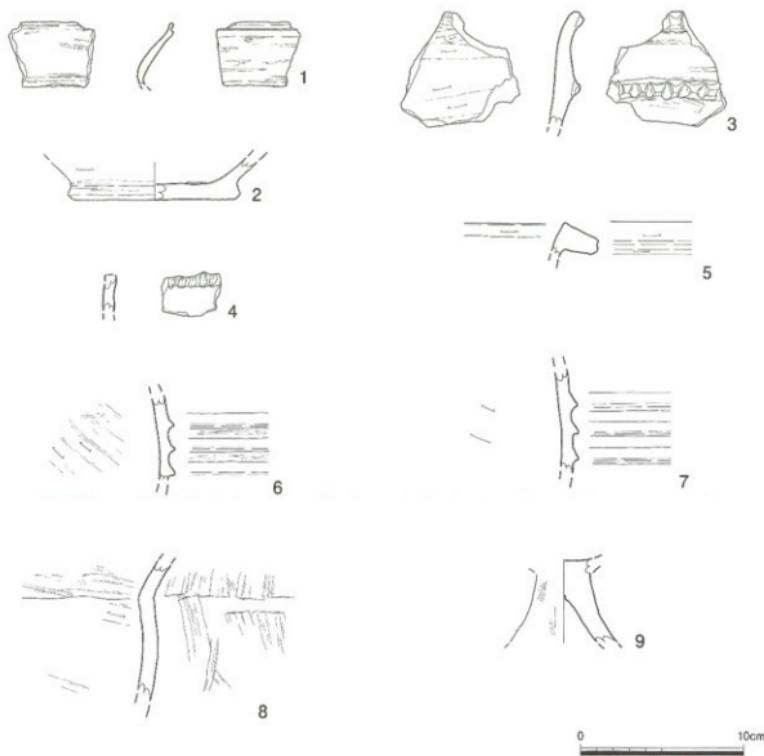
10は中世の青磁碗の口縁部である。花弁状を呈す花口碗もしくは盤の可能性が考えられる。



第7図 近世土坑平面図・断面図 (S=1/20)



第8図 近世土坑出土遺物 (S=1/2)



第9図 搅乱中出土遺物(1) (S=1/3)

11は近代の肥前系磁器の染付碗の口縁部である。外面には絵付、内面には型紙刷りにより文様が描かれる。

12~18は近世の陶磁器である。

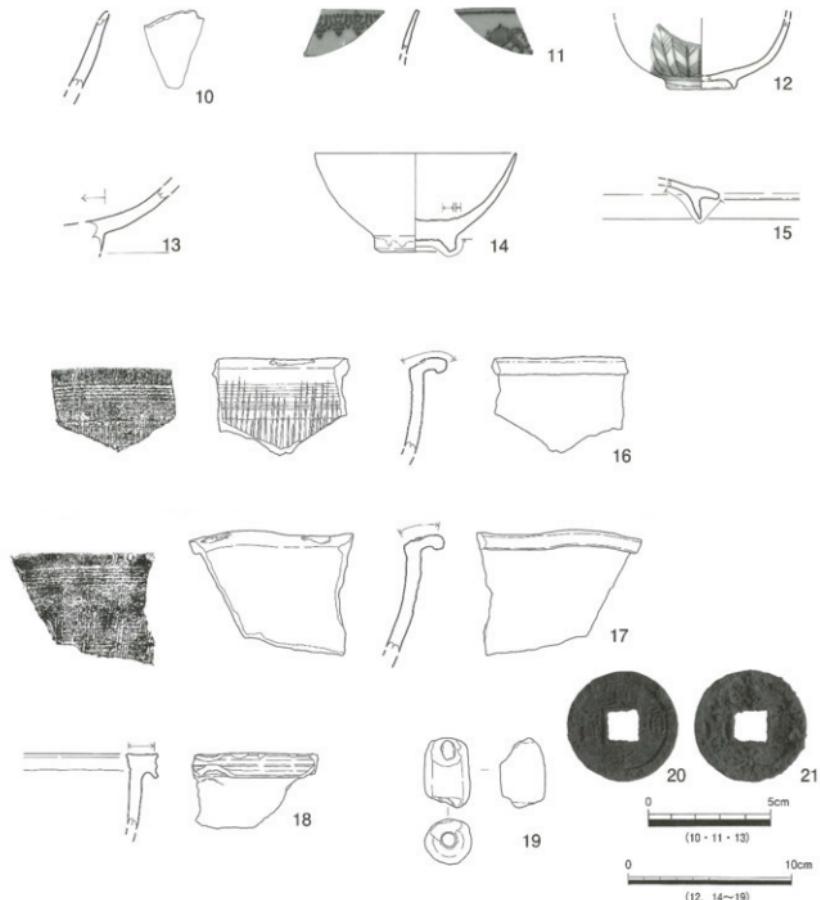
12は肥前系磁器の染付碗である。高台付根から丸みを帯びて口縁部へ立ち上がる丸碗形の器形を呈する。外面には矢羽根文が描かれる。墨付は釉を剥ぎ露胎とする。

13は肥前内野山窯産の可能性がある陶器碗の底部である。内外面に透明釉が掛けられ、見込みには蛇ノ目釉剥ぎが施される。18世紀代に該当する。

14は龍門司焼の陶器の碗である。復元口径は12.4cm、底径は4.2cmを測る。胎土は粒子の細かい赤茶褐色土であり、内外面に黒褐色の鉄釉が掛けられる。見込みに蛇ノ目釉剥ぎが施され、砂目が認められる。高台は無釉とし、内面は平坦に削るが中央にへそ状の突起を残す。

15は薩摩焼の蓋である。外面には蕎麦釉を掛け、身受部より内面は無釉とする。

16・17は苗代川産摺鉢の口縁部であり、17は片口部分と考えられる。いずれも口縁部は外側に折つ



第10図 搅乱中出土遺物(2) (10・11・13: S=1/2 12, 14~19: S=1/3)

て肥厚させ、端部はやや内側に折り返す。口唇部の釉は拭き取られ、貝目が残る。18世紀代に該当する。

18は苗代川産壺もしくは鉢の口縁部である。口縁部は口唇状を呈し、内側にやや張り出す。口唇部は釉剥ぎを施し無釉とする。

19は時期不明の管状土錘である。内径8mm程度の焼成前穿孔を有する。外面は摩滅が激しい。胎土は径2~4mm程度の礫を多く含む。

20・21は寛永通寶である。いずれも「寶」末尾部分が「ハ」の字になる新寛永であり、背面は無文である。素材は青銅である。20は直径2.3cm、穿孔部0.65cm、21は直径2.2cm、穿孔部0.65cmを測る。

表1 試掘調査・確認調査 本調査搅乱中出土遺物観察表

遺物 No.	層位	種別（分類）	器種	残存法 量(cm)	部位	色外	色内	色他	胎土粒	混和材	調整	取上No	接合	備考	
確1	5	土器 (成川式)	甕	-	実底部	7SYR5/2	7SYR6/3	2SY4/1	-	微砂粒 を若干 含む	カ・セ・ 白・褐	外：マメフシ不 明 内：ナデ	-	外画実帶 下にスス 付着	
確2	6	土器 (縄文後～ 晩期)	-	-	胴部	10YR5/1	7SYR5/2	10YR6/1	-	微砂粒 を若干 含む	カ・セ・ 白	外内：ナデのち ミガキ	-		
遺物 No.	層位	種別（分類）	器種	残存法 量(cm)	部位	色外	色内	色肉	色他	産地	特徴	取上No	接合	備考	
試1	-	青磁	碗	復元底 6.2	高台部	7SGY6/1	5GY6/1	N7/0	-	龍泉窯 系	高台唇付及び内面は一部 釉剥ぎ	-			
試2	-	陶器（近世）	甕	-	口～頸 部	N5/0	N5/0	25YR5-2	口唇 5R5/1	苗代川 系		-	内外面に 石灰分付 着		
-	近世 土坑	陶器（近世）	甕?	-	口縁部	7SYR2/3 7SYR4/4	5R4/1	7SYR8/1	-	龍門司 系	船舳、外面を工具で削り 色の濃淡を出す	-			
遺物 No.	層位	種別（分類）	器種	残存法 量(cm)	部位	色外	色内	色肉	色他	胎土粒	混和材	調整	取上No	接合	備考
1	擾乱	土器 (入佐式)	浅鉢	高3.8	口～頸 部	5YR5/1	7SYR6/2	10YR4/1	-	微砂粒 を若干 含む	カ・セ・ 白・褐	外：ミガキ（横） 内：ミガキ（横）	-般		
2	擾乱	土器 (縄文晚期)	深鉢・ 鉢	復元底 9.8	底部	5YR5/2	7SYR5/2	7SYR5/1 25YR5/3 5YR5/2	底	微砂粒 を若干 含む	カ・セ・ 白・褐	外：ナデ（横） 内：マメフのた め不明	-般		
3	擾乱	土器 (縄目交 帯文)	深鉢	高7.1	口縁部	7SYR5/2 10YR4/1	5YR5/4	10R5/1	-	微砂粒 を若干 含む	カ・セ・ 白・褐	外：ナデ 内：ケズリ状ナ デ	-般		
4	擾乱	土器 (弥生前期)	甕	-	口縁部	5YR5/1	10R4/1	10YR4/1	-	マメフ のため 不明	カ・セ・ 白・褐	内外面ともマメ フのため不明	-般		
5	擾乱	土器 (入来Ⅱ式)	壺	残高2.1	口縁部	7SYR5/2	5YR5/3	5YR5/3	-	微砂粒 を若干 含む	金・白・ 褐	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	-般		
6	擾乱	土器	甕	-	胴部	5YR6/4	5YR6/4	5YR6/4	-	微砂粒 を若干 含む	金・カ・ セ・赤	外：ナデ（横） 内：ナデ（斜）	-般		
7	擾乱	土器	甕	-	胴部	5YR6/4	5YR6/4	5YR6/4	-	微砂粒 を微量 含む	金・カ・ セ・白・ 褐	外：ナデ 内：ナデ	-般		
8	擾乱	土器 (東原式)	甕	-	頸部	5YR5/1 7SYR6/3	7SYR6/3	N4/0	-	砂粒を 多く含 む	カ・セ・ 白	外：工具カキア ゲ 径1～3 mmの礫 を含む	-般		
9	擾乱	土器 (成川式)	高杯	高5.2	脚部	5YR5/2 5YR5/4	25YR5/3	10YR5/1	脚内 5YR5/1	微砂粒 を若干 含む	カ・セ・ 白	外内：ミガキ 非マメフしてお り単位不明瞭	-般	赤色地影	

表2 本調査挖乱中出土遺物観察表

遺物 No.	遺構	種別	器種	残存法量 (cm)	部位	色外	色内	色肉	色焦	产地	特徴	取上№	接合	備考	
10	挖乱	青磁	花口碗 ・盤?	32	口縁部	75Y7/2	75Y7/2	75Y7/1	-	龍泉窯 系	口唇部は花卉状を呈する	一般		傾き観測	
11	挖乱	磁器 (近代)	碗		口縁部	N8/0	N8/0	75Y8/1	-		外面:繪付け 内面:型紙刷り	一般			
12	挖乱	磁器 (近世)	碗	復元底4.0	胴~底部	N8/0	N8/0	5Y8/1	-	肥前系	繪付 (矢羽根文) 豊付輪剥ぎ	一般			
13	挖乱	陶器 (近世)	碗		底~高台 部	10YR7/2	10YR7/2 5Y6/3	25Y7/2	-	肥前 内野山 窑?	見込に蛇ノ目釉剥 ぎ 18世紀代	一般			
14	挖乱	陶器 (近世)	碗	口12.4 高6.1 底4.2	口~底部	N4/0	N4/0 25YR5/3	25YR5/3	脚内 25Y R 5/3	龍門司 焼	鉄輪 見込に蛇ノ目釉剥 ぎ 砂目	一般			
15	挖乱	陶器 (近世)	壺・土瓶?		蓋	10YR5/1 10Y4/2	5YR4/1 5YR5/2	5YR5/3	-	-	荷支輪 身支部より内面は 無釉	一般			
16	挖乱	陶器 (近世)	擂鉢		口縁部	5RP5/1	5R5/1	N4/0 5PB4/0	-	苗代川 系	口唇部輪剥ぎ、貝 目 18世紀代	一般			
17	挖乱	陶器 (近世)	擂鉢		口縁部	5RP5/1 10YR3/0	5R5/1 10YR3/0	N4/0	-	苗代川 系	口唇部輪剥ぎ、貝 目 18世紀代	一般			
18	挖乱	陶器 (近世)	壺・鉢?	-	口縁部	5Y4/2	75Y4/2	10R5/4	-	苗代川 系	荷支輪 口唇部輪剥ぎ	一般			
遺物 No.	層位	種別	器種	残存法量 (cm)	部位	色外	色内	色肉	色焦	胎土粒	混和 材	調整	取上№	接合	備考
19	挖乱	管状土錐		-	-	-	25Y5/1 75YR5/4	-	-	細砂粒 多く含む	カ・ セ・ 自	内外面マメ のため不 明	一般		
遺物 No.	層位	種別	素材			直徑: cm	穿孔: cm				特徴	取上№	接合	備考	
20	挖乱	寛永通寶	青銅	-	-	2.3	0.65	-	-		新寛永。背面は無文	一般			
21	挖乱	寛永通寶	青銅	-	-	2.2	0.65	-	-		新寛永。背面は無文	一般			

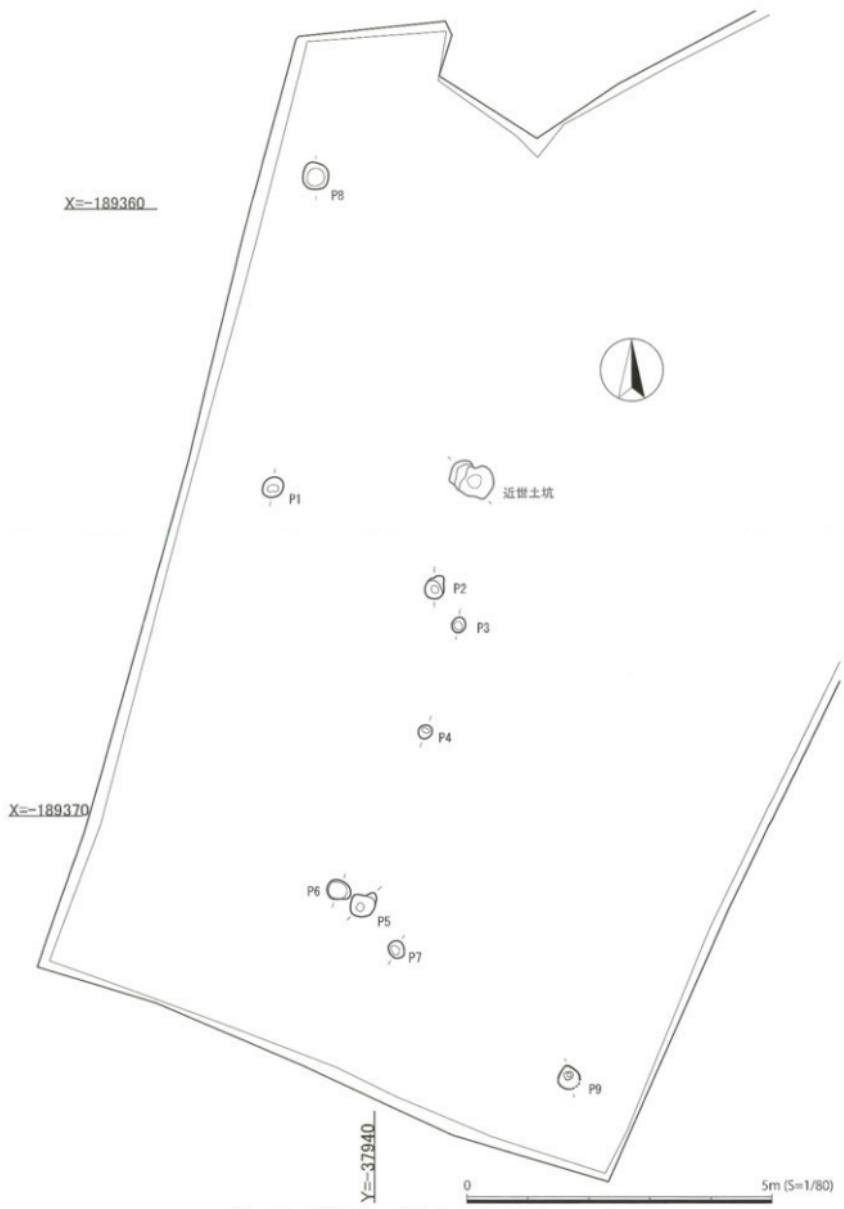
第2節 中世の調査

(1) 遺構

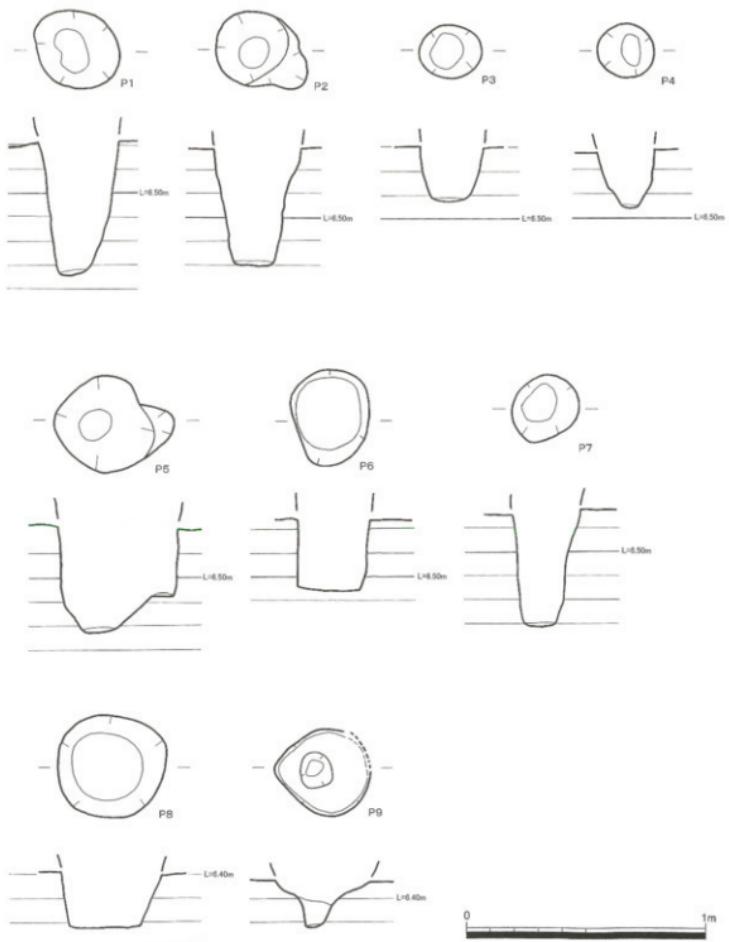
5 + 6層上面で第3層を埋土とするP 1～P 7を、7層上面でP 8、P 9を検出した(第11図・第12図)。建物等のプランは看取できなかった。また、いずれのピットからも遺物は出土しなかった。

法量については下記のとおりである。

	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)		長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)
P 1	39	32	57	P 6	41	30	30
P 2	42	32	51	P 7	29	26	49
P 3	26.5	23	23	P 8	45	43	24
P 4	24	23	25	P 9	40.5	37	20
P 5	51	41	45		※深さ: 検出面から下場まで		



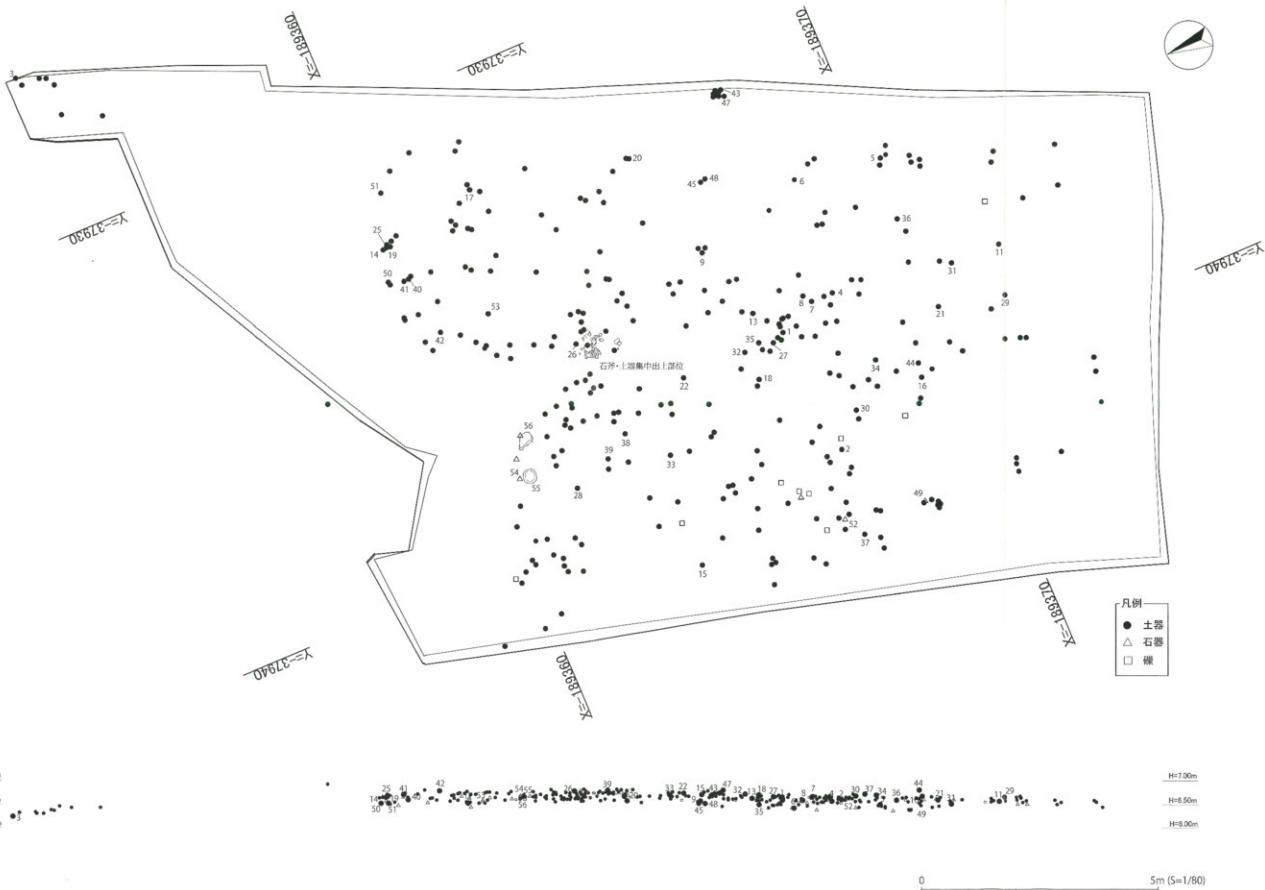
第11図 近世土坑・中世ピット配置図 (S=1/80)



第12図 中世ピット平面図・断面図 ($S=1/20$)

第3節 繩文時代後葉～古墳時代の調査（5 + 6層の調査）

第2章で述べたとおり、調査区の大半では5層と6層は区別することはできなかったため、5+6層として調査を行った。5+6層の遺物の出土レベルを見ると、古墳時代の成川式土器が下のレベルから、繩文土器が上のレベルから出土するといった場合もあり、各時期の遺物が混在して出土する状況であった。5層段階での耕作による搅乱があったか、二次堆積の可能性が考えられる。出土遺物の分布については第13図のとおりである。



第13図 5+6層出土遺物分布図 (S=1/80)

(1) 遺物集中出土部位

石斧・土器集中出土部位

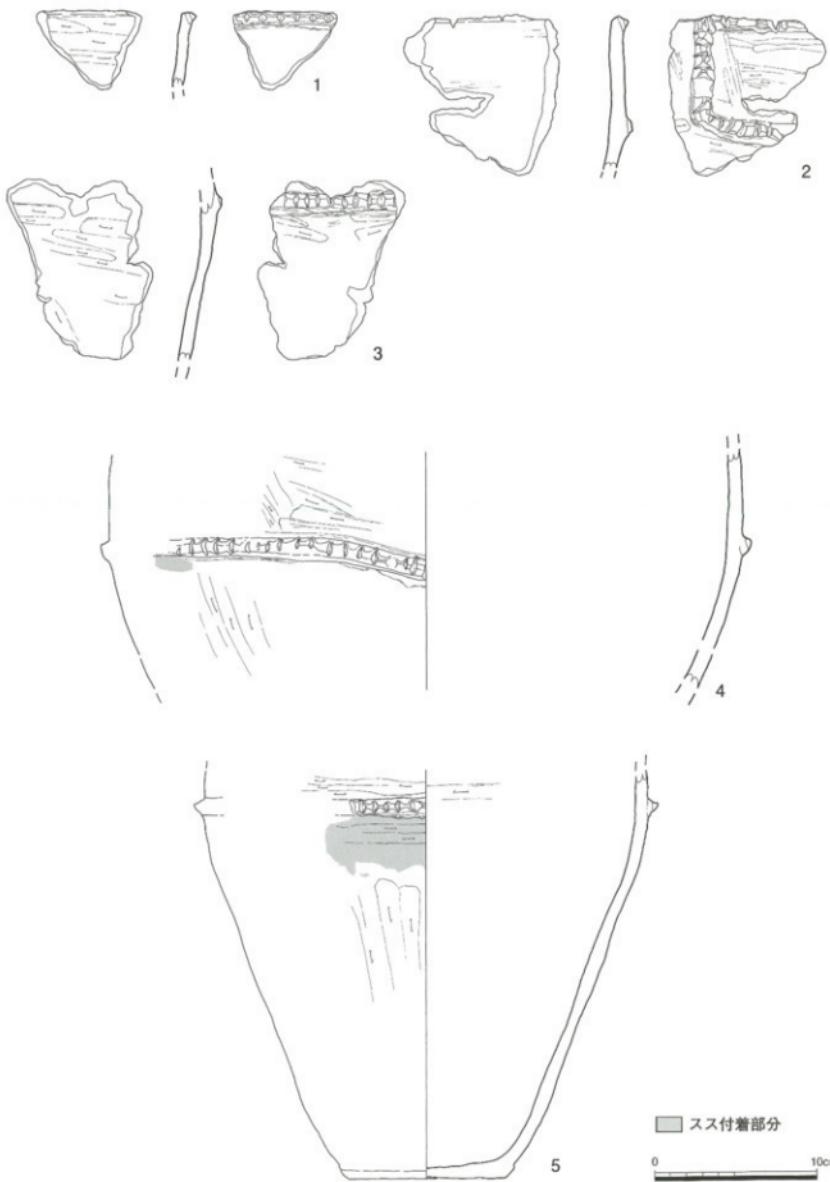
調査区北側の5+6層中で、打製石斧5点（9～13）及び敲石1点（14）、土器がまとめて出土した。土器は、刻目突帯文土器に属する深鉢の破片が5点（1～5）、高橋式土器に属する残存率1/3～1/2の甕が2個体（6～8）まとまっている。その他の土器は無文の胴部片で、どの型式に属するものか判断できなかった。

遺物はほぼ同じ出土レベルで、折り重なった状態で検出された。高橋式土器甕は胴部の下半部で割れており、内面を上に向けて横倒しになっている。この甕と並んで打製石斧と敲石が出土しており、石斧は下から10→9→13→11の順で重なっている。また、これらの甕と打製石斧を取り上げたところ、ほぼ同じレベルで、刻目突帯文土器の破片が出土した。

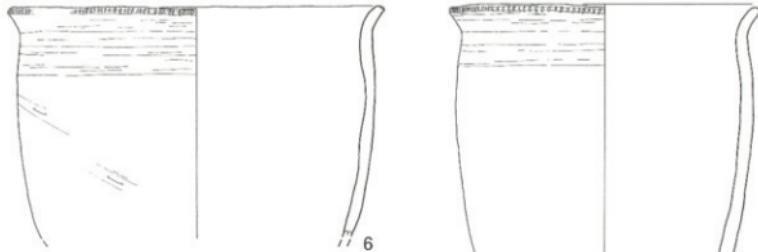
なお、埋納の可能性を考え、土坑の有無を確認するため検出面の周囲を清掃し、サブトレンチを設定して掘削を行ったが、土層の色調からは、掘り込みは確認できなかった。



第14図 石斧・土器集中出土部位平面図・見通し断面図（S=1/10）

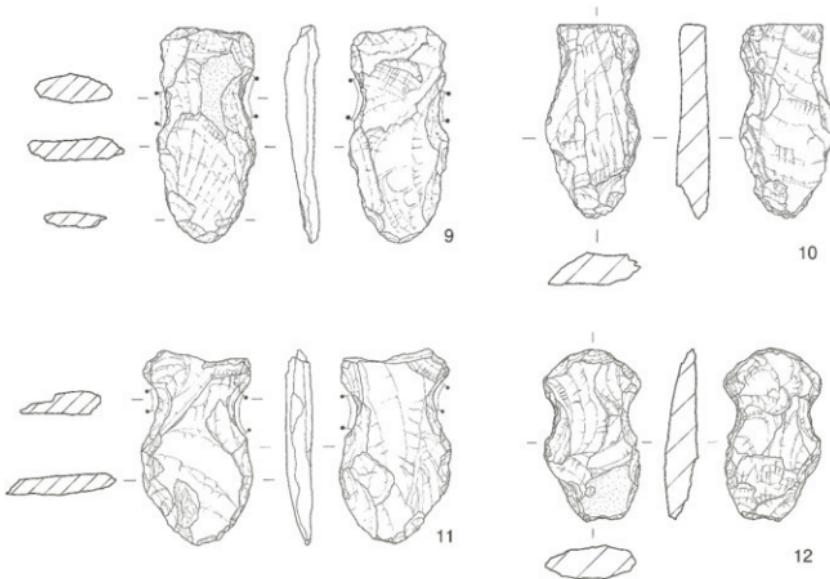


第15図 石斧・土器集中出土部位出土遺物(1) ($S = 1/3$)

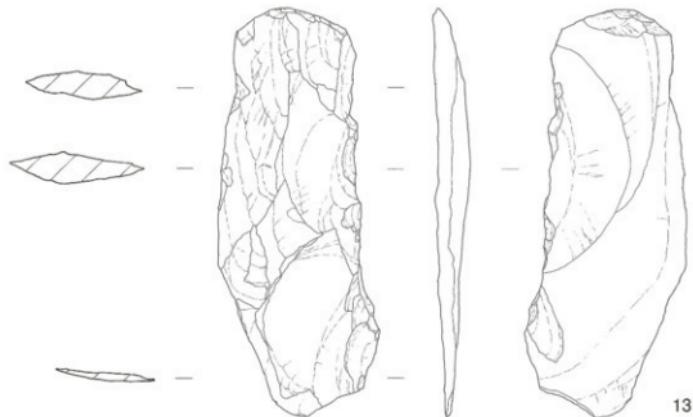


【石器凡例】
— 装着によるつぶれ

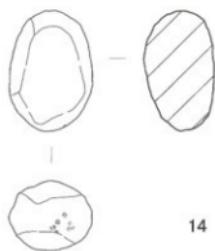
0 10cm



第16図 石斧・土器集中出土部位出土遺物(2) (S=1/3)



13



14

0 10cm

第17図 石斧・土器集中出土部位出土遺物(3) ($S=1/3$)

次に、出土遺物について詳述したい（第16図～第18図）。

土器については、先に述べた型式の判断できる8点を図化した。いずれも器面は摩滅しており、一部調整が不明瞭である。

1～5は刻目突帯文土器の深鉢の破片である。いずれも刻みの断面はV字状を呈することから、ヘラ状工具によるものと考えられる。

1は口縁部の破片である。突帯は口唇部に接しており、小ぶりな刻みを施す。内面は横位のケズリを施す。

2は口縁部から胴部の破片である。胴の屈曲は緩やかで、口縁部は直立する。刻目突帯で窓枠状になると思われる文様を描くものであり、突帯は口唇部に接して貼付けた後、垂下させ、胴屈曲部でやや曲線的に曲げる。断面外面の器面調整は、横位および斜位のミガキ様ナデである。

3, 4は胴部の破片である。どちらも胴部の屈曲は弱い。3は胴部突帯部の器壁を肥厚させている。内面は横位のケズリを施す。4は突帯が右下がりに貼付けられており、突帯下の胴部にはススが付着する。

5は胴部から底部の破片である。底部は復元底径9.6cmの平底で、外面には接合痕を残す。底部から胴部にかけて外へ開き、突帯部から上は緩やかに内傾する器形を呈する。残高は25.2cmを測る。

6, 7は高橋式土器の如意形口縁甕の口縁部から胴部である。口唇部には小ぶりな刻みを細かく施す。6は復元口径23.0cmを測る。7は復元口径18.5cmを測るが、口縁部の歪みが大きく、上面観は正円形にはならないと思われる。器面調整はいずれも、口縁部から頸部にかけては横方向に平行するナデ調整である。また、7には外反する口縁部下にススの付着が看取される。

8は高橋式土器の甕の胴部から底部である。出土状況からは7と同一個体と考えられる。底部はやや上げ底状になり、外面の器面調整は一部ミガキ様となるナデ調整である。

次に石器についてである。9~13は打製石斧である。9~12はいずれも、両側部が抉入状に整形されており、ソケットなどの装着時の固定に適していると考えられる。

9・10は粘板岩製であり、基部はほぼ直線的に整形する。刃部の先端は鋭角になる。9の両側部には稜の潰れが認められ、これはソケットなどの装着によるものと考えられる。また、a面・b面においても、ソケットを装着部と考えられる部分には稜の潰れが認められる。

11・12は泥岩製である。基部と刃部の境に明確な肩を有し、刃部が比較的丸く幅広になる。11の両側部には、ソケットなどの装着によるものと考えられる稜の潰れが認められる。12は基部端部を細かい剥離によって円弧形に整形する。風化が激しく、稜が明確に残っていない。

13は、9~12の打製石斧が長さ10~13cmであるのに対して、25.5cmと大型のものである。石材は泥岩である。両側部は抉入状に整形されており、一見打製石斧の形状に近い。しかし、石斧で言う基部にあたる部分は細かい剥離により円弧状に整形されているものの、刃部にあたる部分は大まかな剥離によって整形するのみで、刃部を作り出していない。さらに、先端部分の厚さは0.4~0.5cmと非常に薄く、使用した痕跡も見られないことから、実用的なものとは考えにくい。以上の特徴からは、「打製石斧の未製品」と考えられる一方、この状態が完成品であると見なせば「大型石製品」とも捉えることができる。この石斧については、2つの可能性を考えておきたい。

14は敲石である。小型で敲打痕跡は側面にわずかに認められるのみであるが、形態的な特徴をふまえ、敲石とした。石材は安山岩である。

表3 土器・打製石斧集中遺構出土遺物觀察表

遺物 No.	層位	種別(分類)	器種	残存法 量(cm)	部位	色外	色内	色地	胎土粒	混和材	調整	取上 No.	接合	備考	
1	5+6	土器 (網目突 帶文)	深鉢	高4.5	口縁部	2.5YR5/2	7.5YR5/2	10YR5/1	-	微砂粒を 若干含む	カ・セ・ 白・褐	外:突倍部 ナデ 口唇:ヨコ ナデ 内:ケズリ (横)	⑩		
2	5+6	土器 (網目突 帶文)	深鉢	高8.0	口縁部	2.5YR5/1 5YR5/2	7.5YR5/2 5YR5/1	5YR5/1	-	微砂粒を 若干含む	カ・セ・ 白・褐	外:ミガキ 程ナデ 口唇:ヨコ ナデ 内:ナデ (横)	④		
3	5+6	土器 (網目突 帶文)	深鉢	-	胴部	5YR5/1 5YR5/3 10YR4/2	5R4/1 5YR5/2	5R5/1 5YR5/2	-	粗砂粒を 含む	カ・セ・ 白・褐	外:ナデ (一部ケズ リ状) 内:ケズリ	⑦		
4	5+6	土器 (網目突 帶文)	深鉢	-	胴部	2.5YR5/3 2.5YR5/1 2.5YR6/3 5YR5/2	2.5YR5/1 5YR5/2 5YR6/2 2.5YR4/1	10YR6/2 5YR5/1 2.5YR4/1	-	粗砂粒を 含む	カ・セ・ 白・褐	外:ナデ(一 部ケズリ 状) 内:マメツ し不明	175	一般	頬き腰 間
5	5+6	土器 (網目突 帶文)	深鉢	高25.2 復元底 9.6	胴~底 部	7.5YR5/1 7.5YR5/3 7.5YR6/3 2.5YR5/3	5YR5/2 7.5YR5/1 7.5YR6/3 N4/0	底 7.5YR4/1 5YR5/2 7.5YR5/3	粗砂粒を 若干含む	カ・セ・ 白・褐	外:ナデ 内:マメツ し不明	296	①②⑥161	突審下 にスス 付着	
6	5+6	土器 (高柄式)	甕	復元口 23.0	口~胴 部	10YR4/1 5YR6/2 5YR5/2	7.5YR6/3	N4/0 2.5YR5/1	-	微砂粒を 含む	カ・セ・ 白・褐 赤	外:頭部ヨ コナデ・胴 部ナデ 内:マメツ し不明	160	163.157	
7	5+6	土器 (高柄式)	甕	復元口 19.2	口~胴 部	N4/0 7.5YR5/1 7.5YR6/2 5YR5/2 5YR5/2	7.5YR6/3 5YR5/1 5YR6/2	10YR5/1 2.5YR5/1	-	微砂粒を 若干含む	カ・セ・ 白・褐	外:頭部ヨ コナデ・胴 部ナデ 内:マメツ し不明	157	②, 86.162.180	頭部に スス付 着
8	5+6	土器 (高柄式)	甕	底7.3	胴~底 部	2.5YR6/4 5YR6/2 5YR6/3 7.5YR6/3	7.5YR5/1 7.5YR5/2 5YR5/2	2.5YR5/1 7.5YR5/1 2.5YR5/1 7.5YR6/2	底 10YR6/2 2.5YR5/1	粗砂粒を 若干含む	カ・セ・ 白・褐	外:ナデ(一 部ミガキ 様) 内:ナデ	⑤	181	
回 No.	層位	種別	器種	石材	長さ:cm	幅:cm	厚さ:cm	重さ:g	使用痕			取上 No.	接合	備考	
9	5+6	石器	打製石斧	粘板岩	13.1	5.9	1.8	185.5	装着部に縦の潰れ			169			
10	5+6	石器	打製石斧	粘板岩	12.0	5.8	2.0	180.1				168			
11	5+6	石器	打製石斧	泥 磐	11.6	6.6	1.6	154.7	装着部に縦の潰れ			165			
12	5+6	石器	打製石斧	泥 岩	10.5	5.7	2.1	155.1				173			
13	5+6	石器 もしくは 石製品	打製石斧未成 品もしくは 大型石製品	泥 岩	25.4	8.7	2	499.6				167			
14	5+6	石器	敲 石	安山岩	7.5	5.1	4.4	205.9	側面にわずかに敲打痕			166			

(2) 遺物

①土器

5 + 6 層中から出土した土器の大半は、縄文時代後期末～弥生時代前期に帰属するものであり、そのほか、弥生時代中期に位置づけられる入来Ⅱ式土器と古墳時代の成川式土器が少量出土した。

縄文時代後期末～弥生時代前期の土器（第18図～第20図）

上加世田式土器～黒川式土器（第18図1～9）

1, 2は深鉢の口縁部である。1は口縁部を肥厚させ、端部は外へ開く。2は口縁部を屈曲させる。やや雑な多条沈線を施す。入佐式に該当する。

3～6は精製浅鉢の口縁部～胴部の破片である。

3は調査区北側の6層中から出土した。肩部から口縁部にかけては短く、「く」の字状に屈曲し外へ開く。口縁部内面にはヘラ状工具による抉りによって、段を形成する。内外面ともミガキ調整を施す。上加世田式に該当する。

4は頸部直下に胴部屈曲部があり、短い頸部は強く屈曲して内面には稜を有する。口縁部は外へ開き、内面にはヘラ状工具で横方向の浅いケズリ状の凹みを巡らしているため、断面形は内湾しているよう見える。器面は摩滅しており、調整は不明である。入佐式に該当する。

5は頸部直下に胴部屈曲部があり、頸部はやや緩い「く」の字状に屈曲し、口縁部は外へ開く。口縁部の内面は、ヘラ状工具で削ることで段を形成する。内外面ともミガキ調整を施す。上加世田式～入佐式に位置づけられる。

6は胴部の屈曲をもたない短頸浅鉢である。口縁部は外面にヘラ状工具による段を形成し、内面には細い沈線を1条巡らせることで、玉縁状に近い形状となる。器面は摩滅しており、調整は不明である。入佐式に該当する。

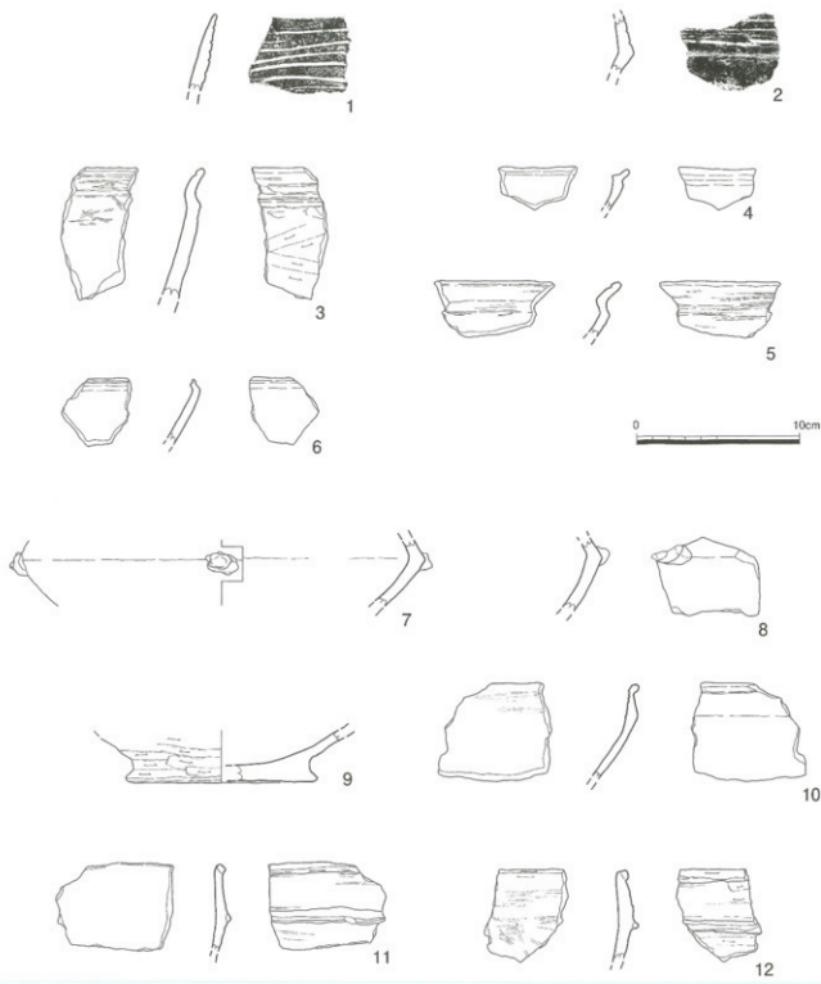
7, 8は鉢の胴部片であり、同一個体と考えられるものである。胴部は強く屈曲し、外面には明瞭な稜を形成し、屈曲部上にリボン状突起を有する。内外面とも器面の摩滅が激しく、調整は不明である。黒川式に該当する。

9は底部片である。平底で底部外面は外へ強く開く。外面はナデ調整を施す。

無刻目突蒂文土器（干河原段階）（第18図10～12）

10は精製浅鉢の破片である。胴部から口縁部までは短い。口唇部の断面形は玉縁状に見えるが、これは口唇部外面に突帯を巡らし端部を丸くおさめ、突帯下の貼付け痕を明瞭に残していることによるものであり、玉縁状口縁が形骸化したものと思われる。胴部外面は稜を有し屈曲するが、内面は緩やかに凸曲するため、屈曲部の断面形逆「く」の字にはならず、三角形状を呈する。外面胴部には一部ミガキ調整が観察され、内面は二枚貝の貝殻条痕による調整の後、ナデ調整を施しているようだが、内外面とも器面が摩滅しており単位は不明瞭である。

11, 12は深鉢もしくは鉢の口縁部～胴部の破片である。口唇部と胴部屈曲部に無刻目突帯を巡らせる。いずれも口唇部の突帯は低く、胴部の突帯は、貼付けた後、指でつまみ出すことで断面は三角形に近い形となる。突帯の上下はヨコナデ調整を施すが、部分的に貼付け痕が明瞭に残る。口縁部は11は直立し、12は内湾する形態となる。

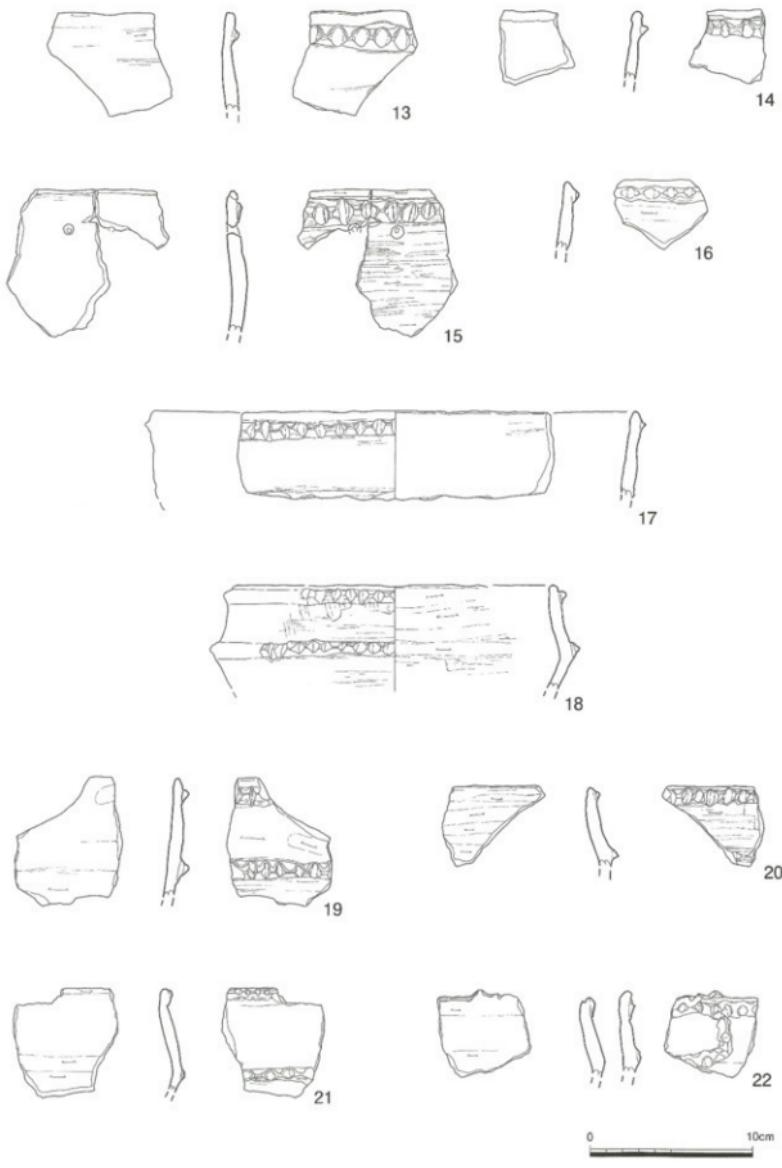


第18図 5 + 6層出土遺物(1) (S=1/3)

刻目突帯文土器 (第19図～第20図)

第19図は深鉢の口縁部から胴部の破片である。

13～15は砲弾形の深鉢と思われるもので、胴部がやや内湾して口縁部は直立する器形を呈し、口縁端部にのみ刻目突帯を施す。口唇部下に突帯を貼付けた後、一部突帯に被せる形で口唇部に粘土紐を



第19図 5+6層出土遺物(2) (S=1/3)



23



24



25



26



27



28



29



30



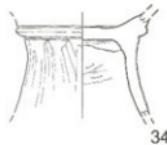
31



32



33



34



35



36



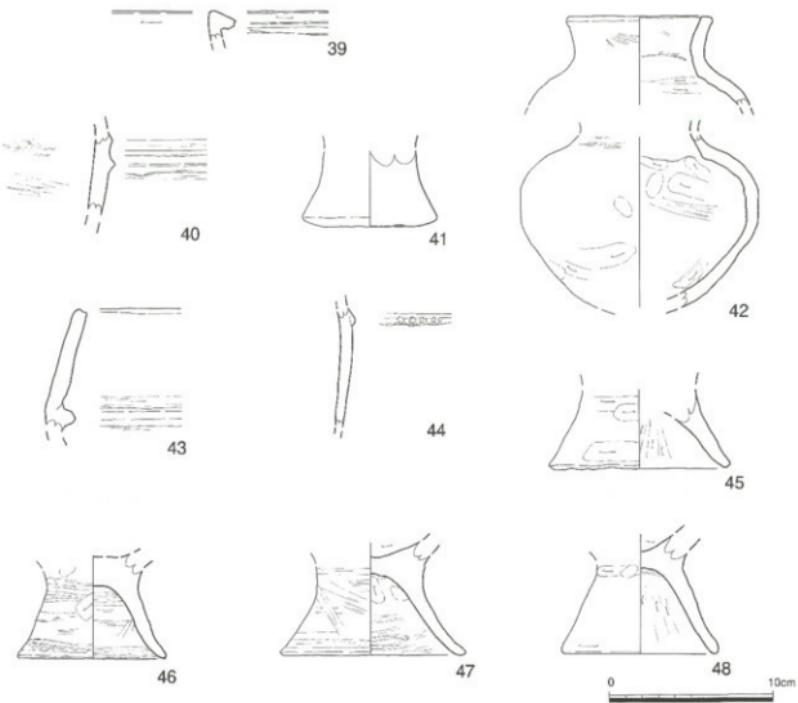
37



38



第20図 5+6層出土遺物(3) (S=1/3)



第21図 5 + 6層出土遺物(4) (S=1/3)

貼付けて肥厚させ、その後に、口唇部下の突帯に刻みを施している。また、13、15は刻みが比較的大きいことから刻目突帯文土器のなかでも古手のものと考えられる。

13は太めの低い突帯上に、平面形が円形の指頭による刻みを施す。

14は断面三角形状を呈する突帯に、棒状工具による深い刻みを施す。

15は太めの低い突帯上に、平面形が梢円形を呈する大ぶりな指頭による刻みを施し、刻みの中心には爪と思われる痕が残る。外面の調整はミガキ様のナデである。また、突帯直下には対になった補修孔が認められる。いずれも画面からの穿孔である。

16は破片が胴部まで残存しておらず、器形が砲弾形であるか、胴部が屈曲するものであるか判断ができない。口縁端部に突帯を施し、工具を突帯上から押し付けている。

17~21は胴部が屈曲する深鉢であり、口縁端部と胴部の2条刻目突帯を施すものである。

17は復元口径29.6cmを測る。口縁部はやや外傾し、口縁端部の突帯は断面三角形状を呈し、棒状工具によると思われる深い刻みを施す。胴部には、欠損しているため定かではないが、刻みを施さない低い突帯を巡らせているようである。

18は復元口径19.4cmを測る。胴部は突帯部で断面逆「く」の字状に強く内側に屈曲する。突帯の

刻みはヘラ状工具によるもので、刻む際に工具をやや右側へ寝かせている。器面調整は、外面はやや荒いナデ、内面はケズリ状のナデによる。

19は脣部の屈曲は弱く、口縁部がやや内傾する。突帯はいずれも断面が三角形状を呈し、口唇部下の突帯はヘラ状工具、脣屈曲部の突帯は棒状工具による刻みを施す。

20は口唇部下の突帯に棒状工具による刻みを施し、刻む際にやや右側へ寝かせている。刻目のつぶれから、右から左方向へ刻んでいると考えられる。内面の器面調整はケズリ状のナデ調整である。

21は口唇部に接した突帯に小ぶりな刻みを施す。脣屈曲部の突帯は低く、刻みは指頭によるものと思われる。

22は装飾性の高いものであり、口唇部に低い山形に突起を付け、突起の上から刻みを施した後、口唇部上面に沈線を1条巡らす。口唇部下の突帯から突帯を垂下させ、脣屈曲部で左へ屈曲させていく。突帯には棒状工具による刻みを施す。

23~29は脣部の突帯部片である。脣部は屈曲しないもの（23~25, 29）や緩やかに屈曲するもの（26, 28）がある。27は内面は屈曲せず、突帯部を断面三角形状に肥厚させているため、外面は屈曲するように見える。

刻みはやや幅の広い突帯に、指頭による刻みを施すもの（23, 24, 26~28）、棒状工具によるもの（25）が認められる。

29はヘラ状工具による刻みを施すものであり、刻む際にやや右側へ寝かせることで平面形が「D」字状になる。刻みが小ぶりであることから、刻目突帯文土器のなかでも新しい段階に位置づけられる。また、器面調整は、内外面ともナデ調整の後、ミガキを施している。

30~33は浅鉢の破片である。

30は、脣部で強く屈曲し、頸部は短く口縁部にかけて直立し、口縁端部は外反する。外面の器面調整はミガキ様ナデである。

31~33は脣部片であり、屈曲部上に沈線を1条めぐらす。器面調整は、31, 33はナデ調整によるが、32はローリングを受けており不明である。

刻目突帯文をもつ深鉢と共に出土する浅鉢に類似する資料であることからここで記載したが、いずれも小片のため、どの型式に属するものか判断が難しい。

34は高壺の脚部である。壺部との境には断面三角形状の突帯を1条巡らし、突帯の上下に沈線を施す。外面の器面調整は継方向のミガキである。弥生時代早期~前期に位置づけられる。

型式不明の土器（第20図35~38）

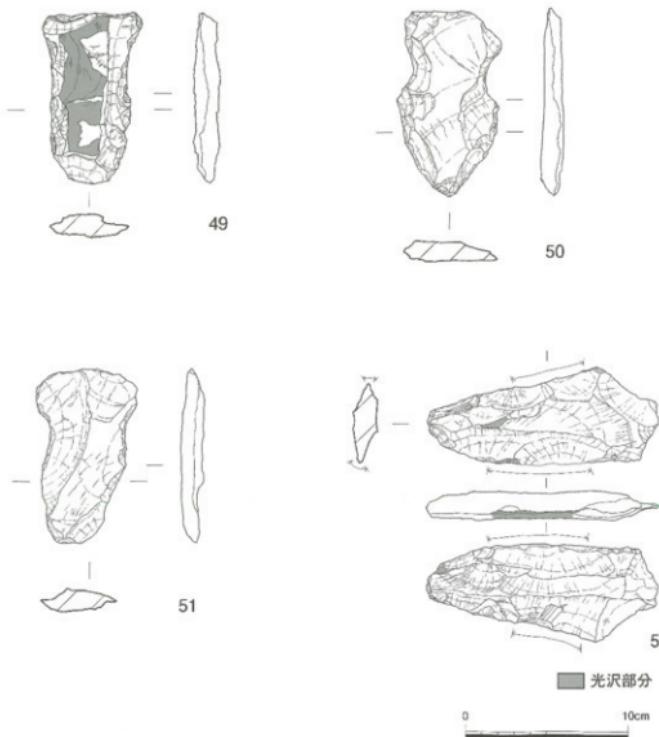
35は深鉢の口縁部である。口縁部は肥厚させ、端部は直立する。器面調整はローリングを受けており不明である。

36~38は深鉢の底部である。

36は底径11.4cmを測る。内面は摩滅が激しく、本来の器面を留めていない。平底の底部外面には接合痕が明瞭に残る。胎土は赤褐色を呈し、金色の雲母を含む。また、底部外面に粗圧痕が1点確認された（写真31）。

37は復元底径8.8cmを測る。平底で縁はやや外へ張り出す。外面にミガキ様ナデ調整を施す。

38は復元底径9.0cmを測る。平底で縁をやや肥厚させる。摩滅しており器面調整は不明である。



第22図 5 + 6層出土遺物(5) (S=1/3)

弥生時代中期前半の土器（第21図39～41）

入来Ⅱ式土器

39は口縁部である。口唇部断面は台形を呈し、端部はナデにより凹む。

40は胴部であり、突帯が2条巡る。

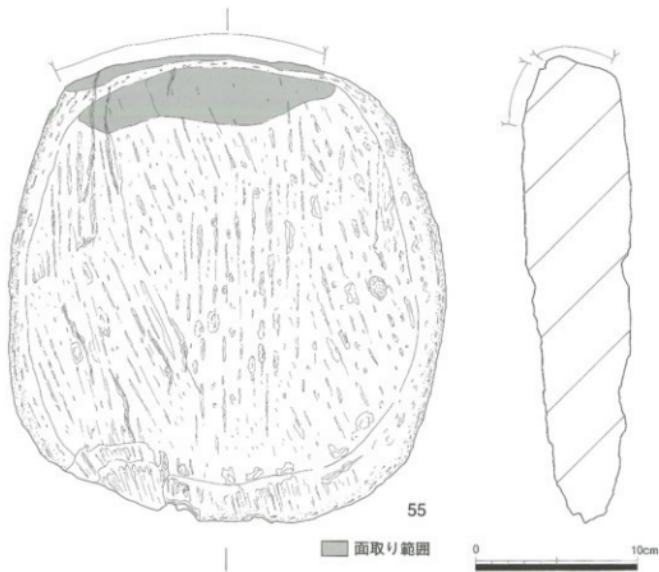
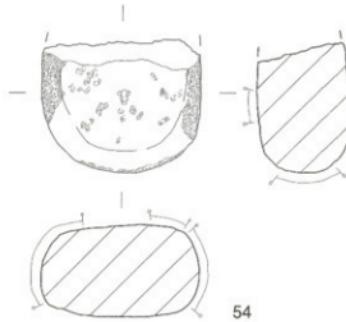
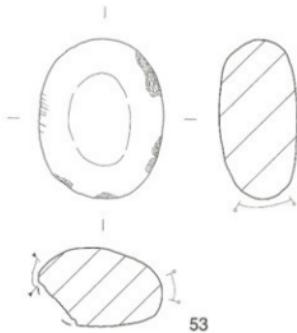
41は脚部である。「充実した脚台」と表現されるものであり、裾はやや外に広がる。

古墳時代の土器（第21図42～48）

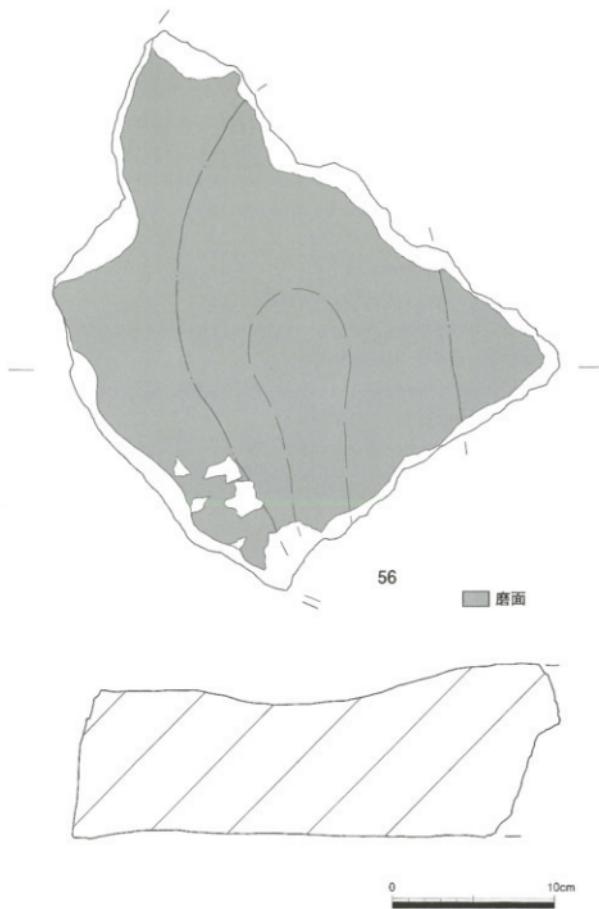
成川式土器

42～48は成川式土器に該当する土器である。

42は小型の壺である。頸部から口縁部にかけて直立し、口唇部はやや外に開き端部はヨコナデによ



第23図 5+6層出土遺物(6) ($S=1/3$)



第24図 5+6層出土遺物(7) (S=1/3)

り平坦に仕上げる。肩部から頸部にかけて強く張り出し、底部は丸底となる器形を呈する。外面はユビナデによる調整の後、口縁部から底部にかけてミガキが施されるが、器面の摩滅のため単位は不明瞭である。部分的に赤色顔料が看取される。内面は頸部に接合痕が残り、調整は荒いナデ、ユビオサエによるもので、やや粗雑な造りとなっている。

43は壺の口縁部である。頸部との境に突帯を一条巡らし、口縁部はやや外に開き、端部を平坦に仕上げる。

44は壺の脇部と考えられる破片である。突帯を一条巡らし、刻目を施す。

45~48は壺の脚部である。いずれも内外面とも器面調整はナデであり、46はハケ目状となる。

②石器・石製品

5 + 6層から出土した石器のうち8点を図化した。いずれも、縄文時代から古墳時代のうちどの時期に帰属する不明である。

なお、磨石・敲石(53)、軽石製品(54)、石皿(55)は、ほぼ同じレベルで並んだ状況で出土しており(写真11)、現位置からあまり動いてはいないものと考える。

打製石斧(第22図49~51、写真32)

4点出土したうち3点を図化し、1点は写真のみ掲載している。

49は両側部に明確な抉りをもたないものである。基部はほぼ直線的に整形する。装着部と考えられる部分は両面とも摩滅し光沢をもつ。頁岩製である。

50は両側部を抉入状に整形するものであり、ソケットなどの装着に適した形となる。基部は一部摩滅し、光沢をもつ。刃部は銳角になる。頁岩製である。

51は両側部を抉入状に整形している。基部は円弧状に整形される。泥岩製であり、風化が激しい。

写真32は、刃部が欠損し基部のみ残存している。基部は円弧状に整形する。頁岩製である。

石鎌状石器(第22図52)

刃部は基部がやや直線的に、先端部にかけてやや円弧状に整形される。頁岩製であり、刃部および両面の後部分には、とろとろした光沢のある摩滅を伴う、強い使用痕が確認される。

磨石・敲石(第23図53、54)

53は楕円形の礫を素材としている。ほぼ全面を磨面として使用しており、敲打痕はほぼ全縁に巡る。裏面が敲打により大きく割れているが、その縁には搔いたような使用痕が残っていることから、割れた面を利用していることがわかる。

54は楕円形の礫を素材としており、半分は欠損している。ほぼ全面を磨面として使用しており、敲打痕は両面とほぼ全縁に巡る。

軽石製品(第23図55)

55は隅丸の方形を呈する大型の軽石製品である。表面上部と側面に何らかの工具により部分的に削られ、面取りがされている。

石皿(第24図56)

石皿は2点出土しており、うち1点を図化した。作業面のほぼ全面を磨面として使用し、縦軸上に凹みが形成される。表面の下端削面の縁は磨滅しており、削れた後に縁を使用したものと考えられる。裏面はほぼ平坦である。

ベットストーン(写真33)

半月状に整形された石器である。面取りされ丁寧に磨かれており、敲打痕や磨面などの使用痕は確認されなかったことから、ベットストーンの可能性がある。写真のみ掲載している。

表4 5+6層出土遺物観察表(1)

遺物 No.	層位	種別 (分類)	器種	残存法 量(cm)	部位	色外	色内	色肉	色他	胎土粒	混和材	調整	取上 No.	接合	備考
1	5+6	土器 (入佐式)	深鉢	高47	口縁部	7.5YR5/2 7.5YR5/1	5YR5/1 5YR5/2	7.5YR5/1	-	微砂粒 を若干 含む	カ・セ・ 白・褐	外：ナデ(横) カ・セ・ 白・褐 内：マメツのため 不明	319		
2	5+6	土器 (入佐式)	深鉢	-	口縁部	5YR4/1 7.5YR6/3	7.5YR5/2	2.5Y5/1	-	微砂粒 を若干 含む	カ・セ・ 白・褐	内外面マメツのた め不明	290		
3	6	土器(上 加賀田式)	浅鉢	高8.0	口～肩 部	7.5YR5/3 N4/0	10R4/1 N4/0	N4/0	-	微砂粒 を若干 含む	金・カ・ セ・白・ 褐	外：ミガキ 内：ミガキ・ナデ	378		
4	5+6	土器 (入佐式)	浅鉢	高25	口縁部	N4/0 7.5YR5/3	N4/0	N4/0	-	細砂粒 を若干 含む	カ・セ・ 白・褐	内外面マメツのた め不明	231		傾き疑問
5	5+6	土器 (入佐式)	浅鉢	高34	口～肩 部	5R4/1	5YR4/1 2.5YR4/1	5YR4/3	-	微砂粒 を若干 含む	カ・セ・ 白・褐	外：ミガキ様ナデ 内：ナデ(横)・ 一部ミガキ様	331		
6	5+6	土器 (入佐式)	浅鉢	高4.0	口縁部	7.5YR6/2 7.5YR5/1	10YR7/3	2.5Y4/1	-	細砂粒 を若干 含む	金・カ・ セ・白・ 褐	外面マメツのため 不明 内：ナデ(横)	326		
7	5+6	土器 (黒川式)	鉢	-	胴部	5YR6/4 5YR5/1	7.5YR6/3	7.5YR5/1	-	細砂粒 を含む	カ・セ・ 白・褐	内外面マメツのた め不明	228	一般	
8	5+6	土器 (黒川式)	鉢	-	胴部	5YR6/4 5YR5/1	7.5YR6/3	7.5YR5/1	-	細砂粒 を含む	カ・セ・ 白・褐	内外面マメツのた め不明	227		
9	5+6	土器 (楕文後 期後葉～ 晩期)	深鉢	底11.8	底部	7.5YR6/4	N4/0	N4/0	底 5YR6/4	細砂粒 を含む φ2mm程 度の雜 を含む	カ・セ・ 白・褐	外：荒いナデ(横) 内：マメツのため 不明	309		
10	5+6	土器 (無刻目突 帶文)	浅鉢	高5.9	口～肩 部	7.5YR5/1 7.5YR6/3	2.5Y5/1	2.5Y5/1	-	微砂粒 を含む	カ・セ・ 白・褐	外：マメツ(一部 ミガキ?) 口唇：ヨコナデ 内：貝殻条痕(横)	70		
11	5+6	土器 (無刻目突 帶文)	深鉢・ 鉢	高5.4	口縁部	N4/0 2.5YR5/2	10R4/1 5YR5/3	N4/0	-	微砂粒 を含む	カ・セ・ 白・褐	外：ナデ(横) 口唇・突帯部：ヨ コナデ 内：マメツのため 不明	256		
12	5+6	土器 (無刻目突 帶文)	深鉢・ 鉢	高5.7	口縁部	10YR6/2 7.5YR6/3	7.5YR5/1	10YR5/1	-	細砂粒 を若干 含む	カ・セ・ 白・赤	外：ナデ(横) 口唇：ヨコナデ 内：ミガキ	一般		

表5 5+6層出土遺物観察表(2)

遺物 No.	層位	種別 (分類)	器種	残存法 量(cm)	部位	色外	色内	色肉	色他	胎土粒	混和材	調整	取上 No	接合	備考
13	5+6	土器（刻 目突帯文）	深鉢	高6.5cm	口縁部	10YR4/1 5YR5/3	5YR5/3	10YR4/1	-	細砂粒 を若干 含む	カ・セ・ 白・褐	外：ナデ（横） 口唇：ヨコナデ 内：ナデ（横）	222	一般	
14	5+6	土器（刻 目突帯文）	深鉢	高4.2	口縁部	2.5YR4/1	7.5YR5/3	2.5Y5/1	-	細砂粒 を含む	カ・セ・ 白・褐	内外面マツのた め不明 一部ナデ（横）	368		
15	5+6	土器（刻 目突帯文）	深鉢	高9.1	口縁部	7.5YR5/2 2.5YR4/2	5YR5/3	7.5YR5/1	-	細砂粒 を若干 含む	カ・セ・ 白・褐	外：ナデ（横位）， 一部ミガキ様 口唇：ヨコナデ 内：ナデ？（マメ ツのため不明）	112	一般	対の補修 孔（両面 穿孔）
16	5+6	土器（刻 目突帯文）	深鉢	高4.3	口縁部	5YR5/2 2.5YR5/4	5YR6/3	7.5YR5/1	-	微砂粒 を含む	カ・セ・ 白・褐	内外面マツのた め不明	156		
17	5+6	土器（刻 目突帯文）	深鉢	復元口 29.6	口縁部	5YR5/2 7.5YR5/3	5YR5/3	2.5Y5/1	-	微砂粒 を若干 含む	カ・セ・ 白・褐	外：ナデ（横） 口唇：ヨコナデ 内：マツシ不明	342	344	
18	5+6	土器（刻 目突帯文）	深鉢	復元口 19.4	口～胴 部上	2.5YR5/3 7.5YR4/2	5YR4/1 5YR5/3	2.5Y5/1	-	微砂粒 を若干 含む	カ・セ・ 白・褐	外：ナデ（横） 内：ナデ（横）， ケズリ状ナデ	64		
19	5+6	土器（刻 目突帯文）	深鉢	高7.3	口縁部	10R5/2 2.5YR5/2	5YR5/3	5YR5/1	-	微砂粒 を若干 含む	カ・セ・ 白・褐	外：ナデ（横） 内：ユビオサエ， ナデ（工具痕）	361		
20	5+6	土器（刻 目突帯文）	深鉢	高4.9	口縁部	10YR4/1 2.5YR4/2	5YR5/4	10YR5/1	-	微砂粒 を若干 含む	セ・白・ 褐	外：ナデ（横） 内：ナデ（横）， ケズリ状ナデ	306		
21	5+6	土器（刻 目突帯文）	深鉢	高6.7	口縁部	N4/0 10YR5/1	N4/0 10YR6/2	N4/0	-	細砂粒 を若干 含む	カ・セ・ 白・褐	外：突帯部ナデ， ヨコナデ 口唇：ヨコナデ 内：ナデ（横）	252		内外面マ ツ
22	5+6	土器（刻 目突帯文）	深鉢	高5.3	口縁部	5YR6/3	7.5YR5/1	10YR4/1	-	マツ のため 不明	カ・セ・ 白・褐	マツのため不明 一部ナデ	75		内外面マ ツ
23	6（7層 との漸 移層）	土器（刻 目突帯文）	深鉢	-	突帯部	5YR5/2	7.5YR5/2	10YR5/1	-	微砂粒 を微量 含む	カ・セ・ 白・褐	外：ナデ（横） 内：マツのため 不明		一般	
24	5+6	土器（刻 目突帯文）	深鉢	-	突帯部	7.5YR5/2 7.5YR5/1	10YR5/2	2.5Y5/1	-	微砂粒 を若干 含む	カ・セ・ 白・褐	外：ナデ（横） 内：マツのため 不明		一般	

表6 5+6層出土遺物觀察表(3)

遺物 No.	層位	種別 (分類)	器種	残存法 量(cm)	部位	色外	色内	色肉	色他	胎土粒	混和材	調整	取上 No.	接合	備考
25	5+6	土器(刻 目突帯文)	深鉢	-	尖部	7.5YR5/4 7.5YR5/3	2.5YR4/1 7.5YR4/1	7.5YR4/1	-	細砂粒 を若干 含む	カ・セ 白・褐	外:ナデ(突 帯) 内:マメツの ため不明	362		類似疑 問
26	5+6	土器(刻 目突帯文)	深鉢	-	尖部	5YR4/1 5YR5/3	5YR5/3	5YR5/3	-	細砂粒 を若干 含む	カ・セ 白・褐	外:ナデ(突 帯) 内:マメツの ため不明	32		類似疑 問
27	5+6	土器(刻 目突帯文)	深鉢	-	尖部	5YR5/2 5YR5/3	7.5YR6/3	2.5Y5/1	-	砂粒 を若干含 む	カ・セ 白・褐	外:ナデ(横) 内:マメツの ため不明	63		
28	5+6	土器(刻 目突帯文)	深鉢	-	尖部	5YR4/1 5YR5/2	7.5YR6/3	2.5Y4/1	-	微砂粒 を微量 含む	カ・セ 白	外:ナデ(突 帯) 内:マメツの ため不明	99		
29	5+6	土器(刻 目突帯文)	深鉢	-	尖部	5YR5/2 10R4/1	7.5YR5/1	10R4/1	-	微砂粒 を若干 含む	カ・セ 白	外:ナデのち ミガキ(鐵) 内:ナデのち ミガキ(横)	254		
30	5+6	土器(刻 目突帯文 期?)	浅鉢	高3.0	口~肩 部	7.5YR5/2	N4/0	N4/0	-	微砂粒 を若干 含む	カ・セ 白・褐	外:ミガキ (横)・ナデ 内:ミガキ (横)	149		外面に スス付 着
31	5+6	土器(刻 目突帯文 期?)	浅鉢	-	胴部	5YR5/2 2.5YR4/1	7.5YR5/1	10YR4/1	-	粗砂粒 を若干 含む	カ・セ 白・褐	外:ナデ(横) 内:ナデ(横)	260		
32	5+6	土器(刻 目突帯文 期?)	浅鉢	-	胴部	10R4/1 5YR5/2	7.5YR5/3	10YR5/1	-	細砂粒 を若干 含む	カ・セ 白・褐	内外面マメツ のため不明	55		
33	5+6	土器 (刻目突帯 文期?)	浅鉢	高3.6	胴部	5YR6/4 5YR5/3	5YR5/2 7.5YR5/2	7.5YR5/1	-	微砂粒 を若干 含む	金・カ セ・白・褐	外:ミガキ 内:ミガキ・ ナデ(横)	100		
34	5+6	土器(株 生前頭)	高杯	-	胎台	5YR5/3 5YR5/2	10YR5/1	N4/0	脚内 2.5YR 4/1 N3/0	微砂粒 を若干 含む	カ・セ 白・褐	外:ミガキ (鐵) 内:ミガキ 脚内:ナデ	154		
35	5+6	土器(純 文後期後 期~晚期)	深鉢	-	口縁部	5YR6/6 7.5YR5/3	5YR6/6	5Y4/1	-	微砂粒 を若干 含む	カ・セ 白・褐	内外面マメツ のため不明	367	220	
36	5+6	土器(純 文後期後 期~晚期)	深鉢	底11.4	底部	2.5YR5/4 10R5/4	2.5YR5/5 10R4/1	10R4/1	底 2.5YR 5/4	微砂粒 を含む φ3mm程 度の粒 を含む	金・カ セ・白	外:ナデ? 内:マメツが 激しく不明	241	120.142	底面に 糊痕

表7 5+6層出土遺物観察表(4)

遺物 No.	層位	種別(分類)	器種	残存法 量(cm)	部位	色外	色内	色地	胎土粒	混和材	調整	取上 No	接合	備考	
25	5+6	土器(刻 目突帯文)	深鉢	-	突帯部	7.5YR5/4 7.5YR5/3	25YR4/1 7.5YR4/1		-	細砂粒 を若干 含む	カ・セ・ 白・褐 不明	外:ナデ(突帯) 内:マメツのため 不明	362		傾き疑問
26	5+6	土器(刻 目突帯文)	深鉢	-	突帯部	5R4/1 5YR5/3	5YR5/3	5YR5/3	-	細砂粒 を若干 含む	カ・セ・ 白・褐 不明	外:ナデ(突帯) 内:マメツのため 不明	32		傾き疑問
27	5+6	土器(刻 目突帯文)	深鉢	-	突帯部	5YR5/2 5YR5/3	7.5YR6/3	25Y5/1	-	砂粒を 若干含む	カ・セ・ 白・褐 不明	外:ナデ(横) 内:マメツのため 不明	63		
28	5+6	土器(刻 目突帯文)	深鉢	-	突帯部	5YR4/1 5YR5/2	7.5YR6/3	25Y4/1	-	微砂粒 を微量 含む	カ・セ・ 白	外:ナデ(突帯) 内:マメツのため 不明	99		
29	5+6	土器(刻 目突帯文)	深鉢	-	突帯部	5YR5/2 10R4/1	7.5YR5/1	10R4/1	-	微砂粒 を若干 含む	カ・セ・ 白	外:ナデのちミガ キ(横) 内:ナデのちミガ キ(横)	254		
30	5+6	土器(刻 目突帯文 期?)	浅鉢	高3.0	口~肩 部	7.5Y R 5/2	N4/0	N4/0	-	微砂粒 を若干 含む	カ・セ・ 白・褐	外:ミガキ(横)・ ナデ 内:ミガキ(横)	149		外面に スス付 着
31	5+6	土器(刻 目突帯文 期?)	浅鉢	-	胴部	5YR5/2 2.5YR4/1	7.5YR5/1	10YR4/1	-	細砂粒 を若干 含む	カ・セ・ 白・褐	外:ナデ(横) 内:ナデ(横)	260		
32	5+6	土器(刻 目突帯文 期?)	浅鉢	-	胴部	10R4/1 5YR5/2	7.5YR5/3	10YR5/1	-	細砂粒 を若干 含む	カ・セ・ 白・褐	内外面マメツのた め不明	55		
33	5+6	土器(刻 目突帯文 期?)	浅鉢	高3.6	胴部	5YR6/4 5YR5/3	5YR5/2 7.5YR5/2	7.5YR5/1	-	微砂粒 を若干 含む	金・カ・ セ・白・褐 揚	外:ミガキ 内:ミガキ・ナデ (横)	100		
34	5+6	土器(鉢 生前期)	高杯	-	給台	5YR5/3 5YR5/2	10YR5/1	N4/0	脚内 2.5YR4 /1NS/0	微砂粒 を若干 含む	カ・セ・ 白・褐 不明	外:ミガキ(縦) 内:ミガキ 脚内:ナデ	154		
35	5+6	土器(縦 文後期後 葉~晚期)	深鉢	-	口縁部	5YR6/6 7.5YR5/3	5YR6/6	5Y4/1	-	微砂粒 を若干 含む	カ・セ・ 白・褐	内外面マメツのた め不明	367	220	
36	5+6	土器(縦 文後期後 葉~晚期)	深鉢	底11.4	底部	2.5YR5/4 10R5/4	2.5YR5/5 10R4/1	10R4/1	底 2.5YR 5/4	微砂粒 を含む φ3mm程 度の輝 石を含む	金・カ・ セ・白	外:ナデ? 内:マメツが激し く不明	241	120,142	底面に 粗粒痕

表8 5+6層出土遺物觀察表(5)

図 No.	層位	種別	器種	石材	長さ:cm	幅:cm	厚さ:cm	重さ:g	使用痕	取上 No	接合	備考
49	5+6	石器	打製石斧	頁岩	10.6	6.1	1.6	113.21	裝着部が磨滅し光沢をもつ	132		
50	5+6	石器	打製石斧	頁岩	11.5	6.1	1.4	130.7	基部が磨滅し光沢をもつ	364		
51	5+6	石器	打製石斧	泥岩	10.8	6.2	1.4	94.85		347		
写真 32	5+6	石器	打製石斧	頁岩	5.4	5.5	1.7	61.05		一般		
52	5+6	石器	石鏃状石器	頁岩	14.3	5.9	1.8	155.3	刃部および両面の後部分にとろつとした光沢のある磨滅	137		
53	5+6	石器	磨石・敲石	安山岩	10.0	7.7	4.9	583.2	ほぼ全面を磨面として使用 ほぼ全線に敲打痕 割れ面の縁に掻いたような痕	301		
54	5+6	石器	磨石・敲石	安山岩	8.2	9.8	5.7	768.0	ほぼ全面を磨面として使用 両面とほぼ全線に敲打痕	67		
55	5+6	石製品	軽石製品	軽石	29.1	28.0	6.9	1998.0	一部面取りして整形	66		
56	5+6	石器	石 砧	安山岩	34.7	31.3	10.7	12100.0	表面ほぼ全面を磨面とし、凹みを形成	69		
写真 33	5+6	石製品	ペツストーン	泥岩	8.9	4.5	3.6	105.54	一部面取りし磨き整形	82		

第4節 池田カルデラ火山性噴出物堆積層（第7層）の調査

5 + 6層を掘り下げ、第7層（池田カルデラ火山性噴出物堆積層）上面を検出し、発掘調査での最終掘削面とした。第7層上面の標高は6.0m～6.5mであり、調査区北側（海側）へ向かってやや下るもの、ほぼ平坦である（第25図）。

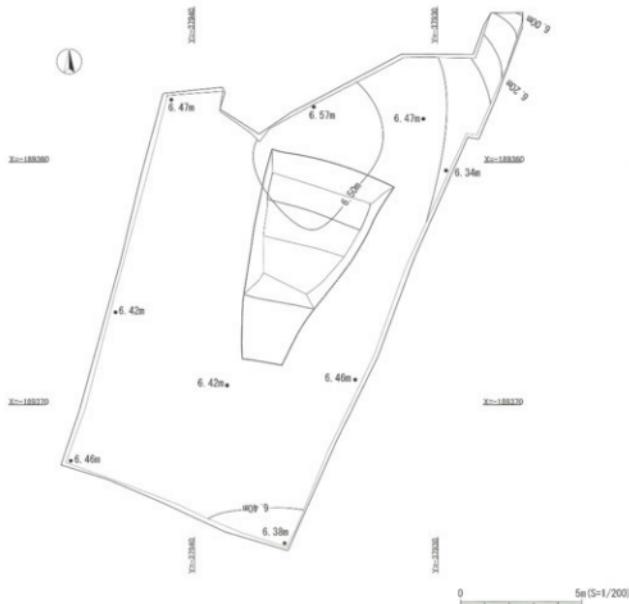
その後、第7層の下位に包含層があるか否かを確認するため、重機を用いて掘削を行った（写真17～19）。

成尾英仁氏によると、池田湖起源のテフラは、池崎火山灰→尾下スコリア→池田降下軽石→池田湖火碎流堆積物→池田湖火山灰の順に堆積しており、指宿市北部台地の低地や谷部では、シラス様の池田火碎流が20mにも達することが確認されている（成尾1983）。

今回の調査区で深掘りをしたところ、まず、こまかく層を成した乳白色～淡褐色の細粒火山灰層が1mほど確認された。これは、池田火山活動の最末期の噴出物である池田湖火山灰層に該当する。その下位に、火碎流堆積物が3m続くのが確認されたところで、安全面を考慮し掘削を終了した。池田降下軽石まで達しなかったため、火碎流堆積物が何m堆積しているのかは確認できなかった。また、池田湖火山噴火以前の包含層の有無も不明である。

【引用・参考文献】

成尾英仁1983「指宿地方における遺跡の火山噴出物層序 その1 北部台地」『鹿児島考古』第17号



第25図 第7層上面地形図および調査区完掘状況（S = 1/200）

第4章 まとめ

(1) 近世～近現代の調査成果

5 + 6層上面で、近世に比定される性格不明の土坑を1基検出した。また、搅乱中からは肥前系陶磁器や、苗代川産、龍門司焼等の薩摩焼の陶器が出土した。岩本麓遺跡の周辺は、江戸時代在郷武家の麓集落であったことで知られているが、出土遺物はいずれも日用雑記の類であり、特に武家の集落であったことを示すものはみられなかった。

(2) 中世の調査成果

5 + 6層上面および第7層上面でピットを9基検出した。建物等のプランは看取できず、性格は不明である。遺物としては、試掘調査および搅乱中で龍泉窯系青磁が2点出土した。

(3) 5 + 6層の調査成果

5 + 6層からは、縄文時代後期末から弥生時代前期、弥生時代中期、古墳時代の土器や石器が出土した。5層と6層を区別することは困難であり、遺物の上下動が確認できることから、5層段階での耕作による搅乱があったか、二次堆積の可能性が考えられる。

縄文時代後期末から弥生時代前期の土器については、型式名（様式名）で言うと、上加世田式土器・入佐式土器・黒川式土器・干河原段階・刻目突帯文土器・高橋式土器が出土しており、本遺跡周辺で連続と生活が営まれていたことがわかる。

そのうち主体を占めるのは、刻目突帯文期の土器である。南部九州においては、刻目突帯文土器が板付II式と併行する弥生時代前期中頃まで残存することが、藤尾慎一郎氏や柴畠光博氏によって明らかになっている（柴畠2006、藤尾1993）。器種としては、深鉢・浅鉢（逆「く」の字状の口縁部形態のもの）・高坏もしくは台付鉢があるが、今回の調査では壺は確認されなかった。浅鉢と高坏・台付鉢の出現時期については、宮地氏による北部九州における編年では夜臼I式期（宮地2008）、柴畠氏による東南部九州における編年でも同様に夜臼式期（柴畠2006）とされている。また、深鉢について刻みの施文具を見ると小ぶりなものは少なく、指頭や棒状工具・ヘラ状工具による比較的大ぶりなものが多い。北部九州では夜臼II式期になると指頭による刻みは消滅し、工具による小ぶりなものになる（宮地2008）。ただし、志布志市稻荷追遺跡における炭化物の年代測定結果からは、指頭による刻みや大ぶりな刻みをもつ土器が弥生時代前期前葉に併行する可能性も指摘されており（藤尾・坂本・東013）。刻みからは、一概に時期の新旧を判断できない状況である。上記のことから、岩本麓遺跡出土の刻目突帯文土器は、ある程度広い時期幅のものを含むと考えられる。

また、深鉢の中には、底部片に粗圧痕を有するものが1点確認された（写真31-36）。縄文時代晚期から弥生時代前期にかけての時期に位置づけられると考えられるが、土器型式は判断できなかった。

石器・石製品としては、打製石斧、石鎌状石器、磨石・敲石、石皿、軽石製品、ペットストーンが出土した。大陸系磨製石器の出土は確認されなかった。

石斧・土器集中出土部位に関する考察

5 + 6層中で、打製石斧、敲石と高橋式土器、刻目突帯文土器がまとめて出土した。

前述のとおり5 + 6層は全体的に安定しておらず、遺物の上下動も確認できる。ただし、高橋式土器の変形土器については破片が大きく、大型の土器片と石器とが重なり合って出土した状況は、単なる偶然とは考えにくい。高橋式土器の壺に打製石斧と敲石を入れ、その場に置いた可能性も想定して

おきたい。

なお、高橋式土器と石器を取り上げたところ、ほぼ同じレベルで刻目突帯文土器が出土した。上で述べたとおり、南九州においては刻目突帯文土器が弥生時代前期まで存続することが指摘されている。しかしながら、本遺跡の石斧・土器集中出土部位出土の刻目突帯文土器について言えば、いずれも小片であること、そして5+6層中の遺物の移動が大きいことを考えると、高橋式土器と石斧と共に関係にあったとは積極的に評価できない。

また、石器をまとめて高橋式土器の壺形土器に入れたとすると、その意味の解釈は、刃部を作り出しておらず実用的なものは考えにくい遺物番号13（第17図）の打製石斧をどう捉えるかによって変わってくる。「打製石斧の未製品」と捉えるならば、打製石斧の製品と未製品を土器に収納し保管していた、またはそのまま廃棄された可能性が考えられる。「大型石製品」として捉えるならば、製品自体にシンボリックな意味合いがあったことが想定され、儀礼・祭祀的な行為があった可能性も考えられよう。今回の調査からはこれ以上の言及はできないため、今後の類例の増加を待ちたい。

【引用・参考文献】

- 桑畠光博2006「東南部九州における縄文から弥生への土器変遷」『大河』第8号大河同人
東 和幸・羽島敦洋・沢明啓（編）2012『福荷追遺跡』鹿児島県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第169集
藤尾慎一郎1993「南九州の突帯文土器」『鹿児島考古』第27号 鹿児島県考古学会
藤尾慎一郎・坂本 稔・東 和幸2013「志布志市福荷追遺跡出土弥生前期突帯文土器の年代学的調査—大隅半島の弥生前期の実年代—」
『縄文の森から』第6号 鹿児島県立埋蔵文化財センター
宮地聰一郎2008「凸帯文系土器（九州地方）」「総覧 縄文土器」「総覧 縄文土器」刊行委員会

（4）学校教育・生涯学習への遺跡の活用について

発掘調査期間中、遺跡の活用の場として、市が主催する学校教育事業や生涯学習事業と連携し、下記のとおり発掘調査体験を実施した。

①職場体験学習における発掘体験（写真21）

市内の中学2年生を対象とした職場体験学習の受け入れを行った。期間は5月12日～16日、参加生徒数は8名である。生徒はまず指宿市考古博物館 時遊館COCOはしむれで指宿の地層や土器について学習した後、岩本麓遺跡で土層の清掃作業および5+6層の掘り下げ作業を行った。

②市民講座における発掘体験（写真22）

一般を対象とした市民講座「まちの宝を知ってみよう」の一環として、発掘体験を行った。期日は6月11日、受講者は市内外在住の12名である。受講者は5+6層の掘り下げ作業を行い、全員が遺物を掘り出すことができた。

発掘調査で得た成果については、今後指宿市考古博物館で保管し、今後展示を行うなどして、市民への還元を図る予定である。



写真1 指宿市北部空撮



写真2 調査区北側法面層位(1)



写真3 調査区北側法面層位(2)



写真4 調査区東壁層位



写真5 先行トレンチ完掘状況



写真6 第4層検出状況



写真7 5+6層上面
近世土坑・中世ピット・攪乱検出状況



写真8 近世土坑完掘状況



写真9 中世ピット5・ピット6完掘状況



写真10 5+6層遺物出土状況(1)



写真11 5+6層遺物出土状況(2)



写真12 5+6層遺物出土状況遠景



写真13 第7層上面検出状況

写真14
石斧・土器集中
出土部位(1)



写真15
石斧・土器集中
出土部位(2)



写真16
石斧・土器集中
出土部位(3)
石斧取り上げ後



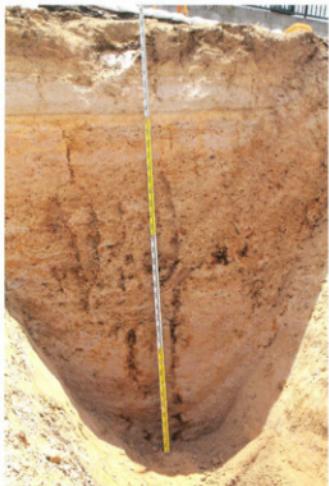


写真17 第7層深堀り東壁



写真18 第7層深堀り西壁



写真19 第7層（近景）



写真20 発掘調査作業状況



写真21 市内中学校職場体験学習



写真22 市民講座発掘体験

写真23 試掘・確認調査出土遺物



写真24 近世土坑出土遺物



写真25 搅乱出土遺物①



写真26 搅乱出土遺物②



10



11 裏



11 表



13



12



14



15



16 裏



16 表



17 裏



17 表



18



19



20



21

写真27 石斧・土器集中出土部位出土遺物①

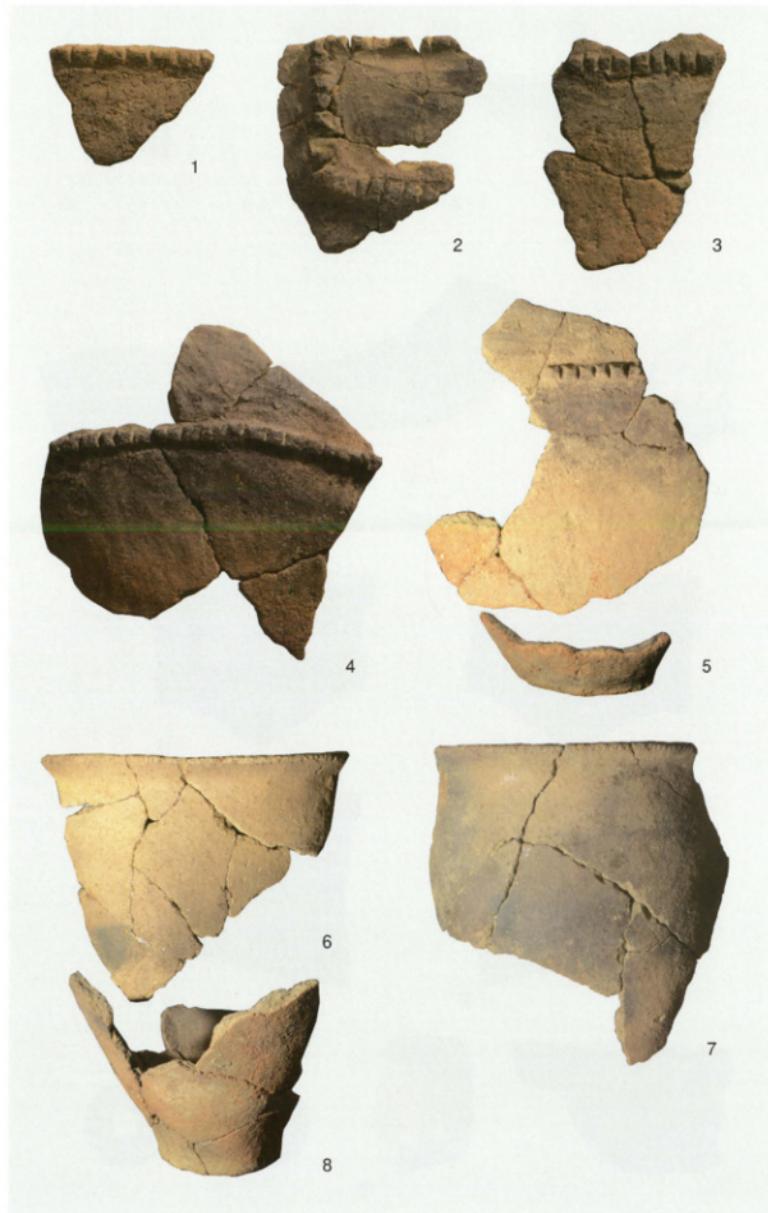


写真28 石斧・土器集中出土部位出土遺物②



9



10



11



12



13



14

写真29 5+6層出土遺物①

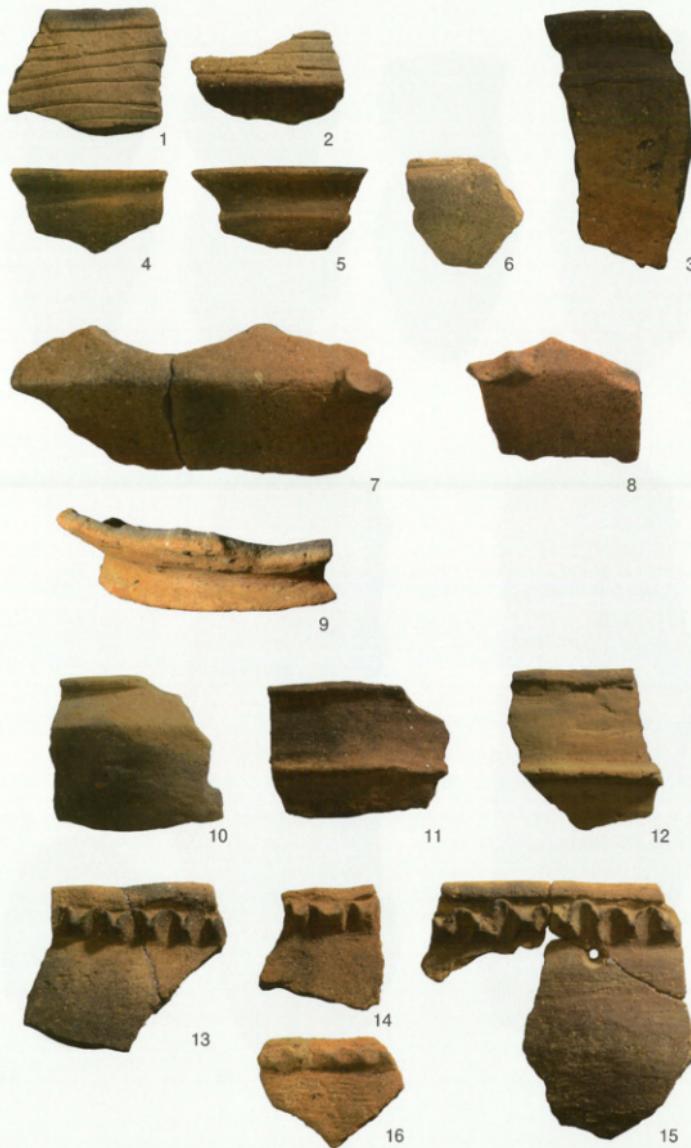


写真30 5 + 6層出土遺物②



17



18



19



20



21



22



23



24



25



28



29



30



31



32



35



34



37



38

写真31 5+6層出土遺物③



写真32 5 + 6層出土遺物④



49

51



50

51



打製石斧



52

写真33 5 + 6層出土遺物⑤



53

ペットストーン



54



55



56

報告書抄録

ふりがな	しどういわもとふもとせんかくふくこうじにともなうはっくつちょうさほうこくしょ いわもとふもといせき
書名	市道岩本麓線拡幅工事に伴う発掘調査報告書 岩本麓遺跡
副書名	-
巻次	-
シリーズ名	指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	第57集
編著者名	恵島 琢子 中摩 浩太郎 錄田 洋昭
編集機関	鹿児島県指宿市教育委員会(指宿市考古博物館時遊館COCOはしむれ)
所在地	〒891-0403 鹿児島県指宿市十二町2290 TEL:0993-23-5100
発行年月日	平成28年3月31日

所取遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
岩本麓遺跡	指宿市岩本麓	46210	210-137	31° 17° 16°	130° 36° 13°	H26.5.8~7.16	約240m (岩本麓線)	

所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
岩本麓遺跡	散布地	縄文時代～弥生時代前期	石斧・土器集中遺構	入佐式土器、黒川式土器、刻目突帯文土器、高橋式土器、打製石斧、敲石等	
		弥生時代中期	-	入来II式土器	
		古墳時代	-	成川式土器	
		中世	ピット9基	龍泉窯系青磁	
		近世	土坑	薩摩焼陶磁器(薩代川窯、龍門司焼)、肥前系陶磁器、寛永通宝	

市道岩本麓線拡幅工事に伴う発掘調査報告書

岩本麓遺跡

平成28年3月

発行

指宿市教育委員会

鹿児島県指宿市十二町2290

印刷所

濱島印刷株式会社

鹿児島市上之園町17の2

